

桜井市

# 平成29年度国庫補助による 発掘調査報告書

纏向遺跡第192次調査  
脇本遺跡第22次調査  
二反田古墳の検討

2019. 3. 15

桜井市教育委員会



桜井市

# 平成29年度国庫補助による 発掘調査報告書

2019. 3. 15

桜井市教育委員会



## 序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約7割を占める山地より流れ出る栗原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流がほぼ東西に横断し、この地に生きる多くの人々に限りない豊かさを与え続けています。

市内には大和川の北側に芝遺跡、纏向遺跡、箸墓古墳、南側には大福遺跡、吉備池廃寺、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業のひとつとして市内遺跡の調査、保存に力を入れており、本書には平成29年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち纏向遺跡第192次調査と脇本遺跡第22次調査のほか、二反田古墳の物理探査の成果をおさめております。本報告書によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事して頂いた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くお礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成31年3月15日

桜井市教育委員会

教育長 上 田 陽 一



## 例 言

1. 本書は、平成29年度国庫補助事業として桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本報告書は、縦向遺跡第192次調査と臨本遺跡第22次調査のほか、二反田古墳の物理探査の成果を掲載している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会  
教育長 上田陽一  
事務局長 奥田道明  
桜井市縦向学研究センター所長 寺澤 薫  
文化財課長 橋本輝彦、主幹 文化財係長事務取扱 丸尾 亘、調査研究係長 福辻 淳、  
主査 松宮昌樹、主査 丹羽恵二、技師 森 暢郎、技師補 飯塚健太  
臨時職員 三沢明未、藤村裕美、中屋菜緒、生島雅美
3. 調査担当者：丹羽恵二、三沢明未、藤村裕美
4. 調査補助員：堂浦千景、直木志織、松村朋美、乗本愛実（奈良大学）
5. 調査作業員：森 貞之、北島 弘、北島奈美子、竹島 満
6. 整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、吉川晴美、小松令子、太田久仁子
7. 現地調査及び遺物整理に関して以下の機関、団体、個人の方々からさまざまなご指導、ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）  
青柳泰介（奈良県立橿原考古学研究所）、岡田雅彦（奈良県立橿原考古学研究所）、小栗明彦（奈良県立橿原考古学研究所）、賀来孝代（毛野考古学研究所）、鐘方正樹（奈良市教育委員会）、関川尚功（上牧町教育委員会）、光石鳴巳（奈良県立橿原考古学研究所）、原田昌浩（大阪府教育委員会）、廣瀬 覚（奈良文化財研究所）、埴輪検討会
8. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は三沢がおこなった。  
なお、第3章2. 二反田古墳における物理探査については、天理大学の小田木治太郎氏と岸田徹氏に依頼し、附載の埴輪の分析については、橿原考古学研究所特別指導研究員 奥田 高氏に依頼し玉稿を賜った。記して感謝いたします。
9. 本書における方位・レベルはすべて世界測地系によるものを示し、レベルは海拔高を表す。
10. 本書記載の遺物実測図の断面は、土師質のもの－白抜き、須恵質のもの－黒塗り、瓦質・瓦－網目、石器・金属器－斜線とした。
11. 図版の遺物番号は、該当する各節の遺物番号に対応している。
12. 出土遺物をはじめとする調査記録一切は、桜井市教育委員会の管理のもと桜井市立埋蔵文化財センターで保管している。活用されたい。

## 目 次

第1章 平成29年度の国庫補助による発掘調査	1
第2章 発掘調査の成果	
第1節 縦向遺跡第192次発掘調査報告	3
第2節 脇本遺跡第22次発掘調査報告	23
第3章 二反田古墳の検討	37
附載1 縦向遺跡第192次調査出土土製品の砂礫について	50
図版	
抄録	

## 挿 図 目 次

図1 桜井市の位置	1
図2 平成29年度国庫補助による発掘調査地位置図 (S=1/40,000)	2
図3 縦向遺跡第192次調査地位置図 (S=1/2,500)	3
図4 調査区平面・断面図 (S=1/80)	4
図5 遺構断面図 (S=1/40)	5
図6 SK-110遺物出土状況 (S=1/40)	6
図7 SX-113遺物出土状況 (S=1/40)	6
図8 落ち込み遺物出土状況 (S=1/40)	7
図9 円筒埴輪 (S=1/6)	8
図10 形象埴輪 (S=1/4)	9
図11 不明埴輪 (S=1/4)	10
図12 SX-104、SD-106、SK-110出土土器 (S=1/4)	11
図13 SX-113出土土器 (S=1/4)	12
図14 落ち込み、その他出土土器 (S=1/4)	13
図15 出土砥石 (S=1/3)	14
図16 出土青銅製品 (S=1/2)	14
図17 巻野内・茅原出土遺物 (S=1/4)	17
図18 外区の文様構成復元図	18
図19 盾形埴輪復元図 (S=1/6)	18
図20 第42次調査(坂田地区)との位置関係 (S=1/300)	19



図21	脇本遺跡第22次調査地位置図 (S=1/2,500).....	23
図22	第1トレンチ平面・断面図 (S=1/80).....	25
図23	SPI02・SPI26など (S=1/40).....	26
図24	第1トレンチ SX127掘削後の平面図 (S=1/80).....	27
図25	遺構断面図① (S=1/40).....	28
図26	遺構断面図② (S=1/40).....	29
図27	第2トレンチ平面・断面図 (S=1/40).....	30
図28	出土遺物① (S=1/3).....	32
図29	出土遺物② (S=1/3).....	33
図30	出土遺物③ (S=1/3).....	34
図31	二反田古墳位置図 (S=1/5,000).....	37
図32	探査測線の位置 (S=1/600).....	40
図33	西区の地中レーダ探査結果 (タイムスライス図).....	41
図34	代表的なGPRプロファイル.....	42
図35	東区の地中レーダ探査結果 (タイムスライス図).....	43
図36	発掘調査結果と地中レーダ探査結果の対比 (S=1/600).....	44
図37	電気比抵抗探査結果 (比抵抗断面図).....	45
図38	鯖付楕円筒埴輪復元模式図.....	46
図39	第3トレンチ出土鯖付楕円筒埴輪 (S=1/6).....	47

## 表 目 次

表1	平成29年度国庫補助による発掘調査一覧.....	2
表2	縦向遺跡第192次調査 出土遺物観察表.....	20・21
表3	巻野内・茅原 出土遺物観察表.....	22
表4	脇本遺跡第22次調査 出土遺物観察表.....	35・36
表5	基準点一覧.....	39
表6	縦向遺跡第192次調査出土の埴輪と土器の表面にみられる砂礫.....	53
表7	埴輪・土器の類型と砂礫の採集推定地の集計.....	54

## 図 版 目 次

### 纏向遺跡第192次調査

- 図版1 纏向遺跡第192次調査 (1)  
調査前状況 (南より)  
遺構検出状況 (北より)  
遺構完掘状況 (北より)
- 図版2 纏向遺跡第192次調査 (2)  
南壁断面 (北西より)  
SX-104断面 (南より)  
SD-106断面 (南より)
- 図版3 纏向遺跡第192次調査 (3)  
SK-110断面 (東より)  
SK-110土器出土状況 (南より)  
SX-113断面 (南より)
- 図版4 纏向遺跡第192次調査 (4)  
SX-113上層土器出土状況 (西より)  
落ち込み 遺物出土状況 (北より)
- 図版5 纏向遺跡第192次調査 (5)  
SX-113青銅製品出土状況 (南より)  
落ち込み断面 (西より)  
調査終了後 (南より)
- 図版6 纏向遺跡第192次調査 (6)  
出土遺物①
- 図版7 纏向遺跡第192次調査 (7)  
出土遺物②
- 図版8 纏向遺跡第192次調査 (8)  
出土遺物③
- 図版9 纏向遺跡第192次調査 (9)  
出土遺物④
- 図版10 纏向遺跡第192次調査 (10)  
出土遺物⑤

- 図版11 纏向遺跡第192次調査 (11)

出土遺物⑥

- 図版12 纏向遺跡第192次調査 (12)

出土遺物⑦

### 脇本遺跡第22次調査

- 図版13 脇本遺跡第22次調査 (1)  
第1トレンチ 全景 (西より)  
第1トレンチ 全景 (南東より)  
SX114完掘状況 (南より)
- 図版14 脇本遺跡第22次調査 (2)  
SX114断面 (東より)  
SX114断面 (南より)  
SX115遺構検出状況 (南より)
- 図版15 脇本遺跡第22次調査 (3)  
SX115検出状況 (上層除去後、西より)  
SX115完掘状況 (北より)  
SX115断面 (北より)
- 図版16 脇本遺跡第22次調査 (4)  
SX115断面 (西より)  
SX116遺物出土状況 (北より)  
SX127断面 (北より)
- 図版17 脇本遺跡第22次調査 (5)  
SX127断面 (南より)  
SX127完掘状況 (北東より)  
SX127内遺構検出状況 (上層除去後、北東より)
- 図版18 脇本遺跡第22次調査 (6)  
SP102断面 (南より)

- SK103断面 (南より)  
SK104断面 (東より)  
SP107断面 (南より)  
SP108断面 (南より)  
SP110断面 (南より)  
SK113断面 (北西より)  
SK116断面 (北より)
- 図版19 脇本遺跡第22次調査 (7)
- SK120断面 (北より)  
SK121断面 (北より)  
SP122断面 (北より)  
SP124断面 (南より)  
SP125断面 (南より)  
SK129断面 (南東より)  
SP130断面 (南より)
- 図版20 脇本遺跡第22次調査 (8)
- 第2トレンチ 全景 (西より)  
第2トレンチ 西壁断面 (東より)  
第2トレンチ 石敷き断面 (西より)
- 図版21 脇本遺跡第22次調査 (9)
- 出土遺物①
- 図版22 脇本遺跡第22次調査 (10)
- 出土遺物②



# 第1章 平成29年度の国庫補助による発掘調査

## 1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良盆地の東南部に位置する人口およそ6万人、面積98.93km<sup>2</sup>の都市である。市域の北西部は奈良盆地東南部にあたる平野部が広がっており、北東部から東部・南部にかけては大和高原や龍門山地などの山地で構成されている。平野部は、大和川の本流である初瀬川とその支流である寺川をはじめとした河川の堆積からなり、古くから農耕地として利用されてきた。付近は、奈良盆地と宇陀・吉野地域との結節点にあたっており、市内には複数の古道が通っているなど、古くから交通の要衝であったと考えられ、市域には多くの遺跡が分布している。

桜井市内では、いくつかの遺跡から旧石器時代の遺物が出土しており、縄文時代については栗殿遺跡など遺構を伴う遺跡の存在が知られていることから、古くから生活の痕跡を窺い知ることができる。市内で人の活動が活発になったのは弥生時代以降であり、絵画土器を出土した芝遺跡や袈裟標文銅鐸を出土した大福遺跡などが平野部に形成されている。古墳時代前期には纏向遺跡が出現し、出現期古墳である箸墓古墳を含む纏向古墳群が登場する。その他にも、桜井茶白山古墳やメスリ山古墳といった大型前方後円墳が築造されており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては赤坂天王山古墳や文殊院西古墳といった古墳が多く築造されている。山田寺跡や安倍寺跡、百済大寺と推定されている吉備池廃寺など、大王家や古代氏族と密接な関係をもつ古代寺院がいくつも存在している。このように桜井市には、古代国家の形成期に重要な役割を果たしたと考えられる遺跡が多数みられる。



図1 桜井市の位置

## 2. 平成29年度の発掘調査

平成29年度に実施した国庫補助による発掘調査は2件であり、その他に二反田古墳において物理探査を1件実施している(表1)。このうち、纏向遺跡第192次調査は駐車場造成に伴う調査、脇本遺跡第22次調査は個人住宅建築に伴う調査である。本書では、纏向遺跡第192次調査と脇本遺跡第22次調査と二反田古墳の物理探査の成果を報告する。

表1 平成29年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	纏向遺跡第192次	巻野内188-1	5月9日～5月26日	48㎡	落ち込み、土坑、土器、埴輪、青銅製品	三沢
2	脇本遺跡第22次	脇本423-3	5月22日～6月19日	41㎡	竪穴住居か、方形土坑、柱穴	丹羽藤村
3	二反田古墳物理探査	大豆越145-1	12月23日～12月26日	1,620㎡		三沢

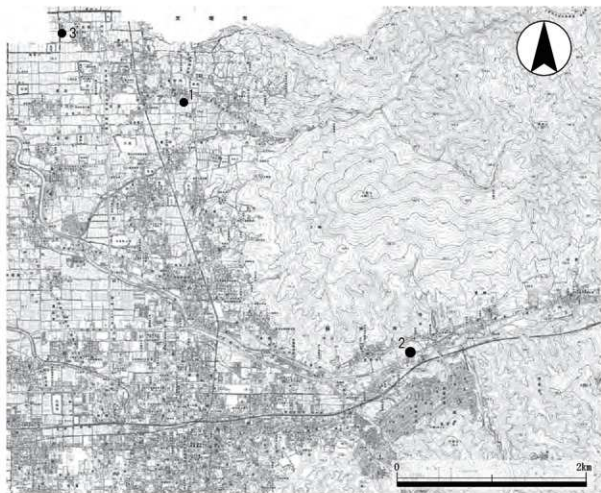


図2 平成29年度国庫補助による調査地位位置図 (S=1/40,000)

## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 縦向遺跡第192次発掘調査報告

#### 1. はじめに

縦向遺跡第192次調査は、大字巻野内188-1における駐車場造成に先立つ発掘調査である。周辺の調査では、調査地から東に約10mの隣接地でおこなわれた縦向遺跡第42次調査<sup>1)</sup>(以下、坂田地区)で、古墳時代前期の落ち込みから鶏形埴輪や冠帽形埴輪、朝顔形埴輪が出土しており、周辺に古墳時代前期の古墳が存在していた可能性が指摘されている。西に10mの隣接地でおこなわれた第165次調査では、奈良時代のピットや古墳時代前期の溝が検出されている。西に35mの場所でおこなわれた第167次調査では奈良時代から平安時代の掘立柱建物が検出されており、柱穴からは瓦が出土している。

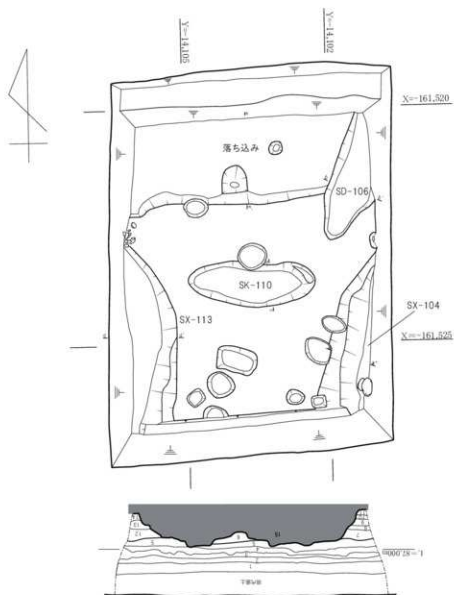
今回の調査地は坂田地区に隣接していることから、坂田地区で埴輪が出土した落ち込みの延長を検出することが期待された。また、過去の調査では明確にすることができなかった古墳の存在についても、新たな知見が得られることが期待された。

調査期間は平成29年5月9日から5月26日で、調査面積は48㎡である。

また、昭和47年度におこなわれた工事立会において、第192次調査出土の埴輪と類似した埴輪が出土しているため、ここで合わせて報告したい。



図3 縦向遺跡第192次調査地位置図 (S=1/2500)



- |                                    |            |
|------------------------------------|------------|
| 1 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト質極細砂 (Fe少量沈着)   | 【現代耕作土】    |
| 2 2.5Y 5/4 黄褐色 極細砂 (Fe沈着)          |            |
| 3 2.5Y 6/3 にぶい黄色 細砂〜極細砂 (Fe少量沈着)   | 【旧耕作土】     |
| 4 10YR 3/3 暗褐色 細砂 (φ2〜3mmの礫、Mg混じる) |            |
| 5 10YR 3/2 黒褐色 極細砂質シルト             | 【包含層】      |
| 6 10YR 3/3 暗褐色 細砂 (φ2〜4mmの礫混じる)    |            |
| 7 2.5Y 3/2 黒褐色 粗砂 (φ2〜3mmの礫混じる)    | 【遺構埋土】     |
| 8 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 シルト             |            |
| 9 10YR 2/1 黒色 粘質土 (φ2〜3mmの礫混じる)    | 【SX-104埋土】 |
| 10 2.5Y 3/1 黒褐色 粘質土                |            |
| 11 2.5Y 3/2 黒褐色 粘質土                |            |
| 12 2.5Y 4/1 黄灰色 粘質土                | 【SX-113埋土】 |
| 13 2.5Y 3/2 黒褐色 粘質土 (φ2〜3mmの礫混じる)  |            |
| 14 2.5Y 4/2 暗オリーブ色 中礫              |            |
| 15 2.5Y 4/3 暗オリーブ色 粗砂 (φ1〜3cmの礫多い) | 【地山】       |



図4 調査区平面・断面図 (S=1/80)



## 2. 調査の成果

### (1) 基本層序及び調査の方法

調査地の南寄りに6m×8mのトレンチを設定した。まず、現代盛土、現代耕作土、旧耕作土をバックホーで掘削し、それ以降を人力に切り替え調査をおこなった。

基本層序は、上から現代盛土、現代耕作土と床土(図3-1・2層)、旧耕作土と考えられるにぶい黄色細砂～粗砂層(3層)となり、それ以下は暗褐色細砂層(4層)、黒褐色極細砂質シルト層(5層)、暗オリーブ色粗砂層(15層)の順となる。暗褐色細砂層と黒褐色極細砂質シルト層からは遺物が多く出土しており、奈良時代の包含層であると考えられる。暗オリーブ色粗砂層より下層からは遺物が出土せず、地山層と判断した。遺構検出は地山層(15層)上面でおこなった。

### (2) 主な検出遺構

調査の結果、古墳時代前期の落ち込みと溝やピットなどを検出した。以下、主な遺構について記述する。

**SX-104** トレンチの東端で検出した遺構で、トレンチの外まで遺構が続いているため正確な形状などは不明である。南北3.4m以上、東西1m以上、深さ約65cmの規模で、この遺構の上層土からは大型複合口縁壺の口縁部や埴輪片が出土している。下層からも2点ではあるが埴輪が出土しており、

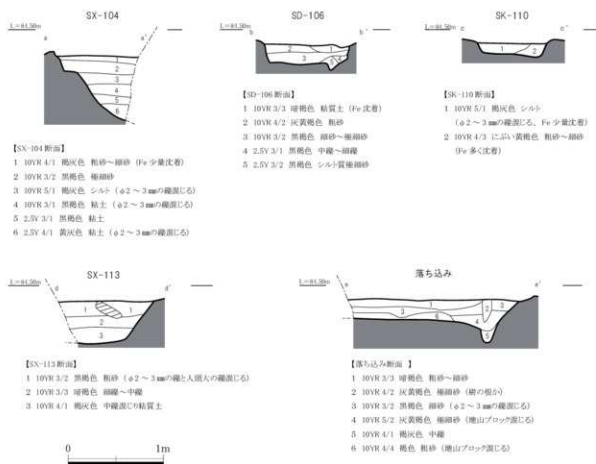


図5 遺構断面図 (S=1/40)

坂田地区で検出されている落ち込みの延長の可能性も考えられるが、遺構の深さが異なり、形態を復元することが困難であるため断定はできない。

**SD-106** トレンチの北東隅で落ち込みに重複して検出した溝状の遺構である。規模は長さ2.8m以上、最大幅1cm、深さ約30cmで、上層埋土からは山陰系の低脚高坪が出土している。

**SK-110** トレンチ中央付近で検出した長辺2.7m、短辺92cm、深さ約10cmの土坑である。出土した遺物は少なくほとんどが小片であったが、遺構の中央付近から土圧でつぶれた状態の壺1点が出土した(図6)。

**SX-113** トレンチの西端で検出した遺構である。トレンチの外まで遺構が続いているため遺構の形状などは不明である。南北4m以上、東西1m以上、深さ約45cmの規模で、上層からは庄内式期頃の土器がまともって出土している(図7)。下層は、上層と比べて遺物がほとんど出土していない。北端の最下層からは青銅製品が1点出土した。

**落ち込み** トレンチの北側で検出した遺構である。北側と西側はトレンチ外まで続いており、遺構の正確な規模などは不明である。南北2m以上、東西4.5m以上、深さ約30cmであり、東側はSD-106が重複している。この落ち込みの上層から吉備系の甕が土圧で潰れた状態で2点出土した(図8)。

また、落ち込みの中央付近には、1ヶ所ビット状に深くなっており、そこから完形の長頸壺が1点出土した。これは下層遺構か、もしくは遺構検出時に上層遺構を見落とししていた可能性が有る。

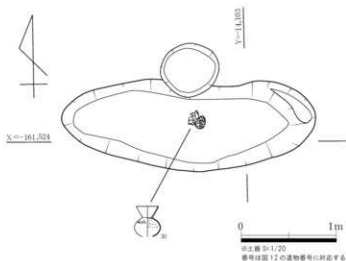


図6 SK-110遺物出土状況 (S=1/40)

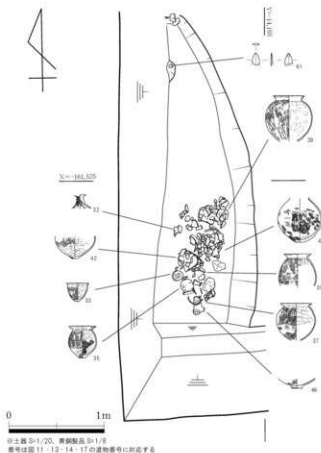


図7 SX-113遺物出土状況 (S=1/40)

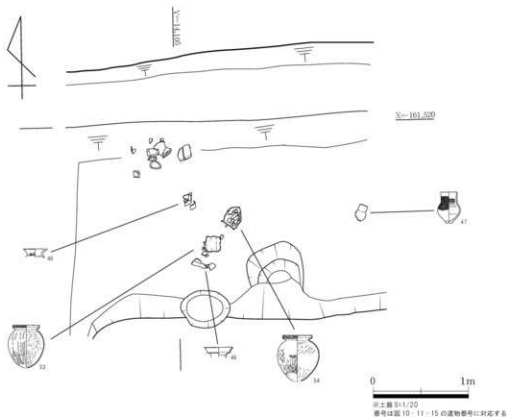


図8 落ち込み遺物出土状況 (S=1/40)

### 3. 出土遺物

今回出土した遺物は、コンテナケースに換算して8箱分であった。細かな法量などについては表2に記載している。

#### (1) 埴輪

出土した埴輪は、明確な遺構に伴って出土したものは少なく、そのほとんどが包含層出土のものである。その中で図化できたものは20点であった。

(1～8)は円筒埴輪もしくは朝顔形埴輪と考えられる埴輪である。いずれも胴部付近の破片であり、正確な規模や形態は不明であるが、ここでは円筒埴輪と呼ぶこととする。(1)は突帯復元径59cmで出土した中では最大の円筒埴輪である。(5)は胴部径を復元することができなかったが、径40cm以上になることは間違いなく、(1)と同じく大型の円筒埴輪であると考えられる。透孔が確認できるものは(2・3)のみであり、(2)は方形もしくは逆三角形透孔で(3)は方形透孔であると考えられる。(4・5)には突帯の剥離痕跡に方形刺突が確認できる。(1)は内面に、(2・4・5)は外面に赤色顔料が塗布されている。

(9～18)は形象埴輪と考えられる埴輪である。(9)は高坏形埴輪の口縁部付近と考えられる埴輪片である。口縁形態は平縁状で内面には赤色顔料が塗布されている。(10)は盾形埴輪である。外区と内区の間は貼り付け突帯による段差表現がされている。貼り付け突帯までの幅は8cmで、外区には直弧文、内区には水字貝状文と考えられる線刻が施されている。盾面と内面の支持部より外側にも赤色顔料が塗布されている。(11・12)は冠帽形埴輪である。坂田地区から出土している冠帽形埴輪と同一

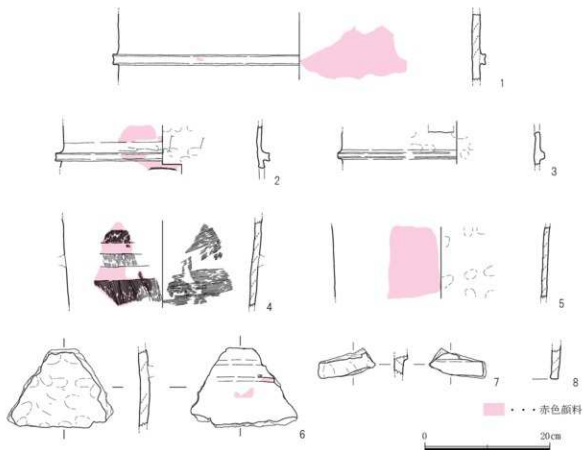


図9 円筒埴輪 (S=1/6)

個体であると考えられる。(11)は頭部周囲を覆う円筒部の側頭部面に取り付けられている鱗部片と考えられる。外面には赤色顔料が塗布されている。(12)は頭頂部の破片である。鋸歯文の線刻が施されており、貼り付け突帯が剥離した痕跡が確認できる。(13～15)は鶏形埴輪と考えられる埴輪片である。(13)はSX-104上層から出土した尾の破片である。横断面は逆V字形であり、両面には尾羽を表現した線刻が確認できる。外面にはわずかだが赤色顔料が塗布されていることがわかる。(14・15)はSX-104下層から出土した埴輪片である。形態は鉤爪状で、断面は楕円形を呈している。それぞれが独立した形態であることから、鶏形埴輪の蹴爪の可能性が考えられた。しかし、坂田地区で出土している鶏形埴輪の蹴爪部分の剥離痕跡は円形であることから、止まり木を掴む爪部分である可能性が高い。ただし、(14・15)の止まり木に接する部分に剥離痕跡などが確認できなかったため断定することはできない。本体との剥離痕跡に、少量であるが赤色顔料が確認できることから、この埴輪には赤色顔料が塗布されていたと考えられる。(16・17)は、器種は不明であるが何らかの剥離痕跡があり、(16)には貼り付け前の沈線がみられる。どちらにも外面に赤色顔料が塗布されている。(18)は形象埴輪の基部である。

(19・20)は同一個体と考えられる埴輪である。(19)には縦横に比較的幅の広い突帯が張り付けられている。内面には赤色顔料が塗布されており、内面下方には楕円形の剥離痕跡が確認できる。詳しい形態は不明である。

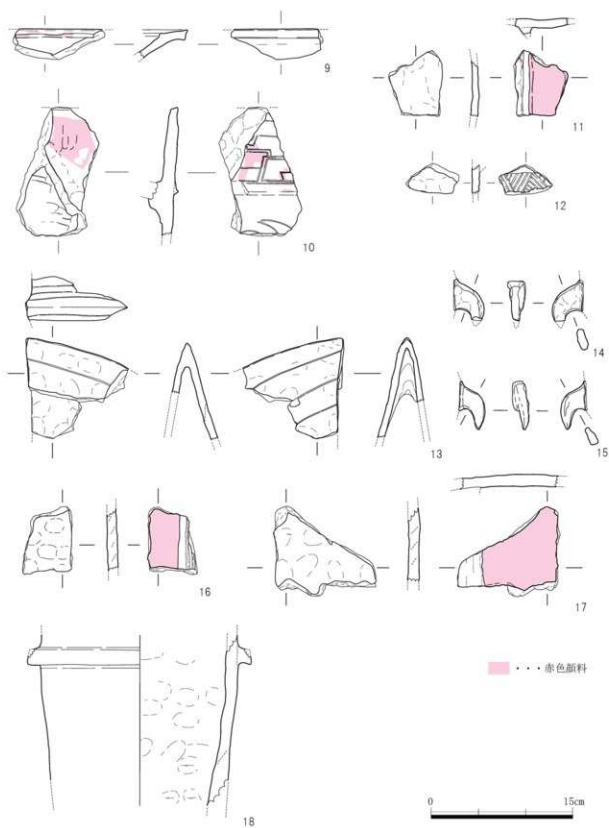


图10 形象填輪 (S-1/4)

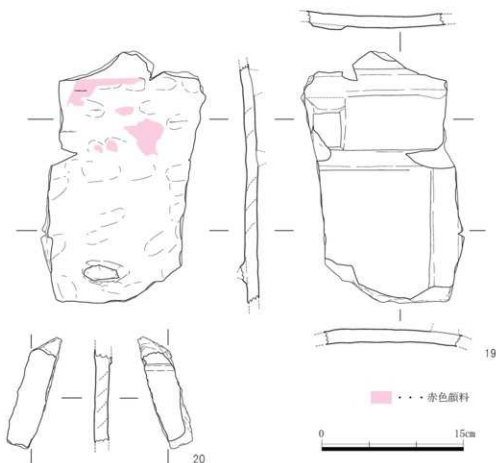


図11 不明埴輪 (S=1/4)

## (2) 土器

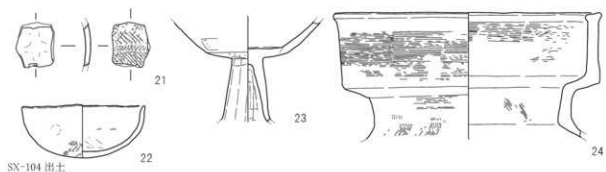
出土した土器の中で図化できたものは40点であった。以下、遺構ごとに記述していく。

(21～24)はSX-104から出土した土器である。(22)は埴である。形は楕円形を呈しており、最大口径は12.8cmである。(24)は大型複合口縁壺である。口径28cmで、口縁部付近の内外面には横方向のハケ、頸部から胴部にかけては縦方向のハケが確認できる。

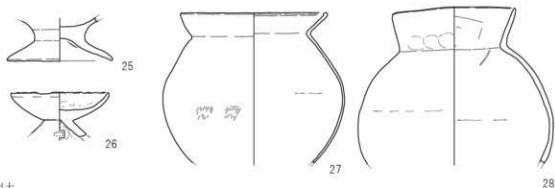
(25～28)はSD-106から出土した。(25)は底径11cm、残存器高4.2cmと低く山陰系の低脚高坏と考えられる。(27)は甕である。口径15.4cmで、調整は内外面ともに磨滅が著しく詳しくはわからないが、外面の一部にハケが確認できる。胴部は偏球状を呈しており、口縁端部はg手法を用いていることから、時期は布留式期<sup>2)</sup>であると考えられる。

(29・30)はSK-110から出土した。(30)はSK-110の中央付近で土圧によって潰された状態で出土した直口壺である。口径11.4cmで、外面調整は磨滅のため不明瞭ではあるがハケが確認できる。

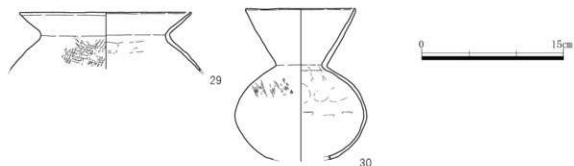
(31～46)はSX-113から出土した。(32～43・45・46)は上層土器溜まりから出土した土器である。土器溜まりから出土した器種は甕(34～42)が中心で、その他に壺(43・45・46)や鉢(33)高坏(32)が少量出土している。(31)は高坏の坏部である。口径9.2cmで、全体に丸みを帯びた形態をしており、下半部で屈曲する。屈曲部分から口縁部にかけて内傾しながら立ち上がっている。東海のブ



SX-104 出土



SD-106 出土



SK-110 出土

図12 SX-104, SD-106, SK-110出土土器 (S=1/4)

ランデーグラス型高坏もしくは北近畿のワイングラス型高坏に類似しているが、これらとは形態的特徴が若干異なり、胎土から在地で製作されたと考えられることから、東海ないしは北近畿の高坏を模倣して在地で製作されたものであると考えられる。(33)は鉢である。口径11.6cm、器高9.8cmと口径が器高を上回っている。(34~42)の甕は、弥生時代の特徴を持ったものと共に庄内式期の特徴を持ったものが出土しており、その中でも(34)には左上がりのタタキがほぼ全面に施されている。(37)については胴部上方に左上がりのタタキ、中部は左上がりのタタキと右上がりのタタキが混じるように施され、その上には粗いヘラナデが確認できる。(42)は胴部の中ほどから底部であるが、胴部中には左上がりのタタキが施されている。(39・40)は同一個体と考えられる甕で、胴部は球形を呈しており、口縁部は外側に段を持つ特徴がある。胴部上半にはタタキが施されており、下半にはタタキを施した後にヘラナデが施されている。(41)は甕の底部である。外面には右上がりのタタキが施されており、底部内面にはケズリが施されている。(43)は短頸直口壺である。頸部から底部にかけて残存してお

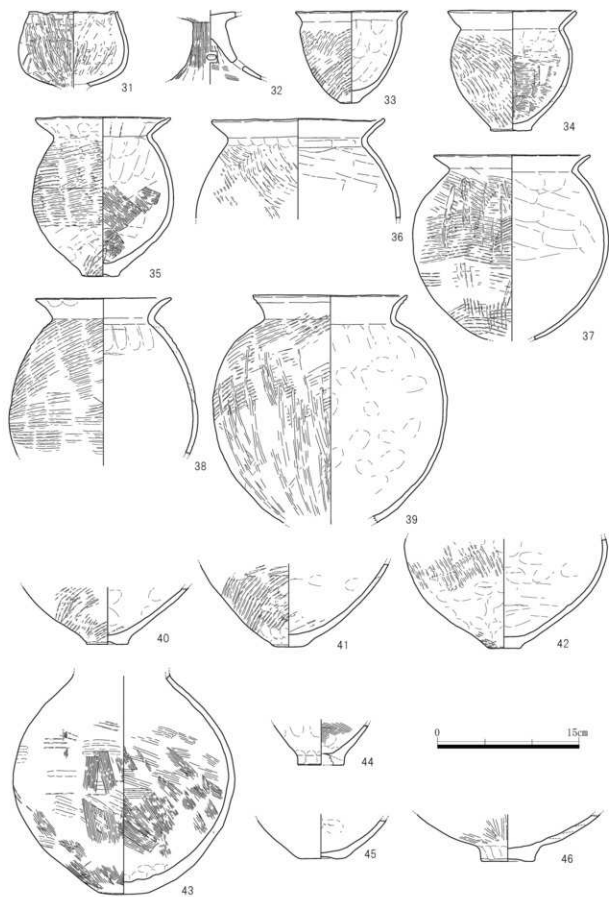
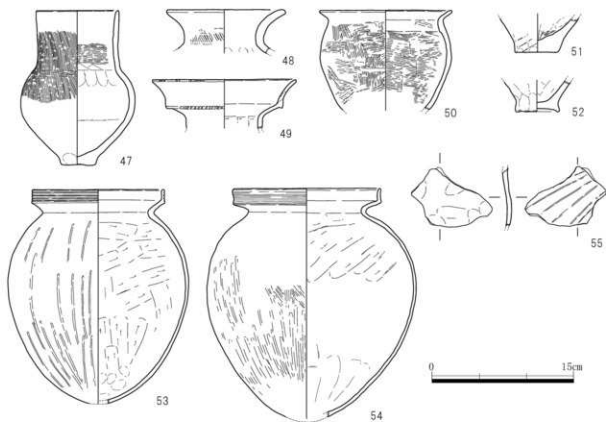
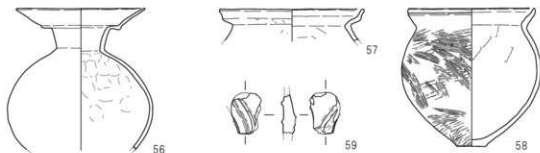


图13 SX-113出土土器 (S=1/4)





落ち込み出土



その他出土

図14 落ち込み、その他出土土器 (S=1/4)

り、外面にはタタキのちハケ、内面には上部の粗いハケと下部の細かいハケが確認できる。

(47～55)は落ち込みから出土した。(47)は落ち込みのビット状に深くなっているところから出土した長頸壺である。口径8.6cm、器高16.1cmで、外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが確認できる。(49)は最上層から出土した二重口壺である。口径15cmと小形で、口縁端部などに刻み目が施されている。

(53・54)は最上層で土圧によって潰れた状態で出土した吉備系の甕である。いずれも、口縁部には平行飾描文、外面は粗いタテミガキ、内面はケズリが施されている。口縁部の施文については、(53)はしっかりとした飾描文が施されており、コの字型の断面が確認できる。(54)は(53)のようには断面に表れておらず、同じ吉備系甕でも違いがある。(55)の器種は不明であるが、胴部に線刻が施された土器である。

(56-59) 機械掘削時や包含層から出土した。(56)は二重口縁壺である。口径13.6cmと小形で、胴部の最大径が過半数にあり偏球状を呈している。(57)は甕の口縁部付近の破片である。口径15cmで口縁部は受口状を呈しており、近江系甕の特徴を持つ。しかし、胎土は在地のものであると考えられることから、瀬向周辺で作られた可能性が高い。(59)は手焙形土器である。覆部片であると考えられるが、小片のため詳細な形態は不明である。

### (3) その他出土遺物

(60)はSX-104の下層から出土した砥石である。長さ12cm以上、幅5.2cm以上で3面に研いだ痕跡がみられる。SX-104から出土しているその他の遺物から、古墳時代前期のものであると考えられる。

(61)はSX-113の下層から出土した青銅製品である。長さ2.6cm以上、幅1.6cm、厚さ0.35cmで下部が破損しているため器種の特定は難しいが、鏃である可能性が高い。

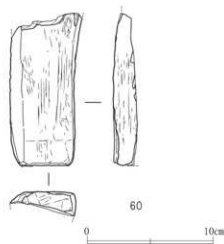


図15 出土砥石 (S=1/3)

### (4) 出土遺物の年代と評価

**埴輪** 今回の調査で出土した埴輪の数はそれほど多くはない。しかし、出土した中には特徴的な埴輪が含まれており、それらを取り上げたうえで坂田地区から出土している埴輪と合わせて評価を加えたい。

出土した埴輪の中で特徴的なものは、高坏形埴輪と盾形埴輪である。高坏形埴輪については、出土したものが小片で形態を復元することは困難であるが、類例が少ないということから、その存在を確認できたということに意義がある。

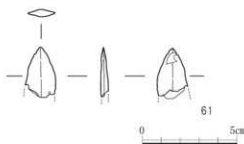


図16 出土青銅製品 (S=1/2)

盾形埴輪については、外区に明瞭な直弧文の線刻が施されており、外区と内区の間には貼り付け突帯による段差が存在しているという点から奈良市佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵)<sup>31</sup>や天理市マエ塚古墳<sup>32</sup>、京都府木津川市瓦谷1号墳<sup>33</sup>から出土した盾形埴輪と類似した形態の可能性もある。このことから、年代については埴輪編年Ⅱ期の中でも古い段階であると考えられ、上記の3例に並んで最古例のひとつであると考えられる。内区の文様については、水字貝状文と考えられる線刻が確認できることから、大阪府和泉市和泉黄金塚古墳出土の革製盾のように、盾面に取り付けられた巴形銅器を表す線刻が施されていたという推測ができる。直弧文など文様の詳細については後述する。

鶏形埴輪については、(13)の尾の形態が坂田地区出土の鶏形埴輪と類似しており、同一個体ではないものの、同じような形態の鶏形埴輪が二個体は存在していたことがわかった。坂田地区で出土している鶏形埴輪の脚部は、止まり木をしっかりと掘りこんでいる表現がなされているが、爪部分は今回出土し

たものとは形態が異なる。(14・15)が爪部分ではないという可能性もあるが、爪部分であると考えた場合、脚部に関しては坂田地区出土の鶏形埴輪よりもより写実的な埴輪が存在していたと考えられる。

(19)については、横断面の曲線からその径を復元すると70cm以上とかなり大型となる。外面には縦方向と横方向の突帯の痕跡が確認でき、横方向のものは平行に並んでいるが、縦方向のものは互いに並んでいる。下方には横方向の突帯が確認できず、確認できている横方向の突帯間隔から考えると広く開いており、横方向の突帯も均一に並んでいたわけではないようである。内面には楕円形の剥離痕跡があり、形態は不明であるが突起のようなものが存在していたと考えられる。また、(19)は内外面ともに丁寧なナデ調整が施されており、内面には赤色顔料が塗布されている。内部に突起が存在する類例が他に確認できないため詳しい形態や器種について断定はできないが、上記に挙げた特徴から割竹形埴輪である可能性が考えられる。

今回出土した埴輪はそのほとんどが包含層から出土したものであるが、その中には坂田地区で出土した冠帽形埴輪と同一個体と考えられる埴輪片(11・12)が含まれており、なおかつ今回出土した埴輪と坂田地区で出土した埴輪が同時期であると考えられることから、これらの埴輪は同一古墳、もしくは同一遺構に伴うものであったと考えられる。そのように考えると、今までは朝顔形埴輪と鶏形埴輪と冠帽形埴輪のみであった器種構成に、新たに高坏形埴輪、盾形埴輪があったことがわかった。これらの埴輪の中で、鶏形埴輪と盾形埴輪の時期が初現期であるということも評価すべき点である。

**土器** 今回検出した遺構のうち、落ち込みやSX-113から出土した土器は庄内式のものであり、その形態から比較的古い要素が窺える。SX-113の上層出土の土器群は弥生時代後期から庄内1式期の特徴を持っているといえ、下層出土土器にも大きな時期差は見られないことから、この遺構が機能していた時期は弥生時代後期から庄内1式期ごろであり、遺構の機能を失ってから一気に埋没してしまったと考えられる。また、このことからSX-113下層から出土した青銅製品の年代も同時期頃であると考えられる。落ち込みの最上層からは、庄内式並行期の吉備系甕が出土しており、その他に出土している土器を見ても布留式期までは下らないと考えられる。SK-110も同様で、出土した土器の時期は庄内式期であると考えられる。

そのような中で、SX-104とSD-106出土土器は布留式期の特徴を持っている。SX-104からは布留1式期頃の土器が出土しており、埴輪も出土している。周辺に庄内式期の遺構が多くある中で検出した埴輪とほぼ同時期と考えられる遺構であるため、坂田地区の落ち込みと何らかの関係があったのではないかと推測できる。SD-106は、今回の調査で検出している庄内式期の落ち込みに重複する形で検出しており、出土した土器は布留0～1式の様相を呈している。坂田地区との関連性を明確にはできないが、出土している埴輪とほぼ同時期の遺構である。

#### 4. 昭和47年度 巻野内・茅原出土の埴輪について

今回の調査で出土した盾形埴輪(図10-10)の文様と類似した文様が線刻された埴輪が、昭和48年3月15日に巻野内・茅原でおこなわれたと考えられる工事立会時に出土していることが近年わかった。

発表の機会に恵まれなかった資料であるが、今回の調査で出土した盾形埴輪と同一個体である可能性が示唆されたことによって発表する機会を得た。以下、詳細を述べていく。

#### (1) 出土地・調査について

工事立会の詳細や正確な出土地については遺物ラベル以外の調査記録が存在していないため不明であるが、「巻之内・茅原」<sup>61</sup>と書かれたラベルが遺物と一緒にあり、桜井市内でどこかという大まかな場所の特定は可能であった。ただし、巻野内と茅原の間には箸中が存在しており、ラベルから読み取れる対象地は広範囲にわたる。

調査担当者に話を聞いたところ、この資料については覚えていなかったが、工事立会で埴輪が出土したのは、記憶にある限りでは箸中、芝、巻野内であったそうである。その中で、巻野内でおこなわれた東西方向に流れる水路の工事立会の成果によって、縦向遺跡第42次調査（坂田地区）をおこなったという経緯がある。当時（昭和60年）は遺跡範囲外であった坂田地区において発掘調査をおこなったのは、この工事立会で多くの土器と埴輪が出土していたためであったそうである。この巻野内の水路を国土地理院の古い航空写真で確認すると、昭和46年5月に撮影されたものは整備されているように見えず、昭和48年5月に撮影された写真には現在の形に道路が整備されている（もしくは工事中である）ことが確認できる。

このようなことから、今回報告をおこなっている資料は巻野内に所在する、坂田地区の南を東西方向に流れる水路の工事立会時に出土したものである可能性が高い。

#### (2) 出土遺物

この調査では、コンテナケース1箱分の埴輪と土器が出土している。工事立会であるため、細かな層位ごとに分けられてはおらず、3つの地点ごとに取り上げているようである。ここでは埴輪以外にも土器が多く出土しており、時期を考える手掛かりとなるため一緒に報告する。図化した埴輪は7点、土器は7点である。以下、詳しく記述していく。

(62・63)は朝顔形埴輪である。(62)は復元径49cmで、内外面ともに板ナデと指ナデが確認でき、赤色顔料が塗布されている。外面に黒斑が確認できることから、野焼き焼成されたものと考えられる。

(63)は復元径41.6cmで、内外面ともに板ナデと指ナデが確認でき、赤色顔料が塗布されている。(62)と(63)の接点を確認することはできなかったが、形態が類似しており同一個体である可能性が考えられる。

(64～66)は円筒埴輪かもしくは朝顔形埴輪と考えられる埴輪である。いずれも外面に赤色顔料が塗布されている。(64・65)は突帯の剥離痕跡に方形刺突が確認できる。(66)は方形透孔の側面部分であるとされる。(67・68)は盾形埴輪と考えられる埴輪である。直弧文の線刻が施されており、内外面には赤色顔料が塗布されている。(67)には中央部付近に楕円形の孔があいているが、埴輪の制作時に穿孔したものなのか、後に破損したものなのかは不明である。外区の幅は8cmで、内区と外区の境には貼り付け突帯による段差表現が確認できる。

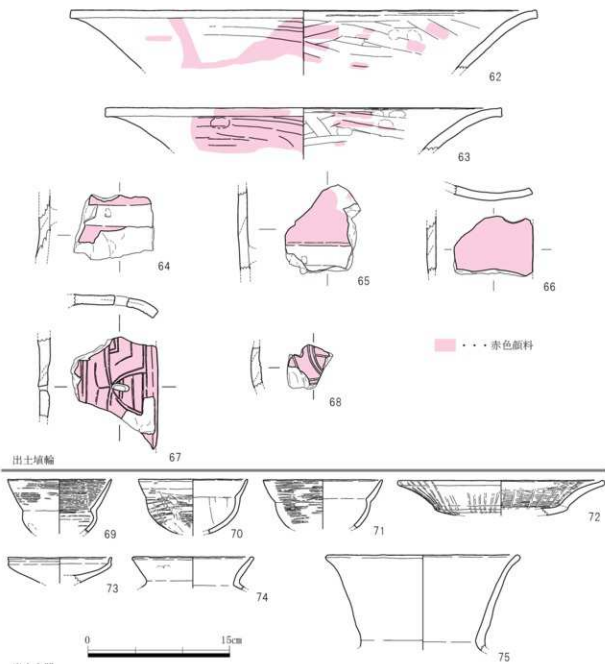


図17 巻野内・茅原出土遺物 (S=1/4)

(69～71) は小形丸底鉢である。いずれも外面にはミガキが施されている。(73) は小形器台である。口径11cmであり、外反した口縁部を持つ。(74) は甕の口縁部である。復元径12.6cmと小形であり、口縁端部はg手法を用いている。

今回報告した埴輪から細かい時期を特定することは困難であるが、(64・65) のように突帯間隔設定技法に方形刺突をおこなっていることや、(67・68) の線刻が明瞭さやその文様などから古墳時代前期の埴輪であると考えられる。土器の時期を見ても、甕の口縁端部はg手法を用いて口径も小さくされており、小型丸底鉢や小形器台などの特徴からも布留1式ごろであると考えられる。

このように、工事立会で出土した埴輪と土器の時期について、第192次調査で出土している埴輪などと同時期のものであると考えられる。

## 5. 工事立会出土の盾形埴輪との関連性とその評価

今回報告した埴輪のうち(図10-10)の盾形埴輪(以下、盾①)と、昭和47年度の工事立会で出土したと考えられる盾形埴輪(図17-67・68 以下、盾②、盾③)の外区の直弧文の文様形態が類似しており、貼り付け突帯までの幅も8cmと同一であるため、同一個体かもしくは同一形態の埴輪である可能性が考えられる。いずれも小片であるため大きさや形態を復元することは困難であるが、文様については盾①と盾②の文様を重ねて復元を試みた(図18)。そうすると、文様の構成は基本的にはパターン①とパターン②の

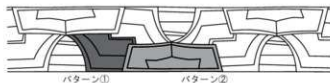


図18 外区の文様構成復元図

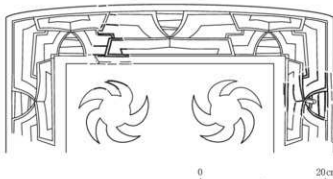


図19 盾形埴輪復元図 (S=L/6)

文様の組み合わせによって描かれていることがわかる。復元できた文様は、先述した通り、佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵)などから出土している盾形埴輪の外区の文様と細部の違いはあるものの類似した忍々網系対称文となった。このことから、佐紀陵山古墳例をもとに盾面上部の文様を復元したのが図19である。盾の上部形態が佐紀陵山古墳例のように山形に湾曲している可能性が考えられ、さらに先述した通り内区の水字貝状文が巴形銅器を模していた場合、和泉黄金塚古墳出土の革裂盾に形態が類似してくる可能性があるため、復元案では盾①の上部形態に沿って少し湾曲させている。盾①の配置位置は正確にはわからないが、内区に水字貝状文が確認できることと、裏面の円筒部との支持部が右下がり張り付けられていることから、盾形埴輪の上部でも左側の破片であると推測できる。また、支持部の形態は上部がドーム状になっていたと考えられ、盾①で確認できる支持部の痕跡の角度から、内区の中でも比較的左端に近い位置であったと考えられる。盾②と盾③の配置についても正確な位置は不明であるが、盾①との文様の同一性を表すために盾②については復元案に当てはめている。それぞれの埴輪の文様の向きや赤色顔料が内外両面に塗布されていることから、盾②は右側面の外区部分、盾③は上部もしくは下部の外区付近の破片であると考えられる。

佐紀陵山古墳や瓦谷1号墳出土の盾形埴輪は、東方仁史氏の分類<sup>7)</sup>のA類1式に分類されている。今回出土した盾形埴輪も外区に忍々網系対称文が施されており、外区と内区の間には段差が存在しているということからA類1式であると考えられるが、内区の文様が平行線文ではなく水字貝状文(もしくは巴形銅器を模したものである)ことから、A類1式の中でもさらに細分化できる可能性がある。このA類1式に分類される盾形埴輪は最古段階に位置づけられるものであり、先述している通り、今回出土した盾形埴輪と過去の工事立会で出土している盾形埴輪は佐紀陵山古墳やマエ塚古墳、瓦谷1号墳と並んで最古例のひとつであると考えられる。

## 6. まとめ

今回の調査では、坂田地区で埴輪が出土した落ち込みの延長を検出することはできなかった。SX-104は落ち込みと関連する遺構の可能性はあるが、現状では断定できない。しかし、SX-104からは鶏形埴輪片、奈良時代の包含層からは坂田地区で出土した冠帽形埴輪と同一個体であると考えられる埴輪片や盾形埴輪、高形埴輪などの埴輪が出土しており、調査地周辺に埴輪に関係する古墳ないしは遺構が存在していたのは確かである。埴輪の時期については、昭和47年度出土の埴輪と合わせて復元できた盾形埴輪の外区文様や段差表現などから、埴輪編年Ⅱ期の古い段階である古墳時代前期中葉ごろと考えられ、従来考えられてきた坂田地区出土埴輪の年代と相違はない。

また、今回の調査で検出した遺構の時期から、周辺には庄内式期頃に活発な人の営みがなされていたであろうと考えられる。布留式期になると埴輪が出土していることから、古墳が築造されていた可能性が高いと考えられ、生活域ではなく墓域として機能していたと推測できる。調査地の周辺には中・後期古墳が多く築造されており、前期古墳については確認されていないため断定はできないが、今後の周辺の調査が進むことによって明らかになることを期待したい。

(三沢)

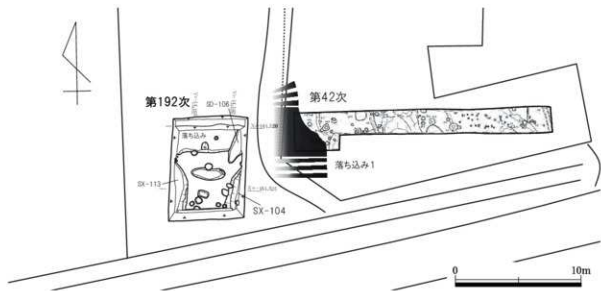


図20 第42次調査（坂田地区）との位置関係（S=1/300）

### 【註記】

- 1) 橋本輝彦・橋爪朝子2007『縦向遺跡発掘調査報告書－巻野内坂田地区における調査報告－』桜井市教育委員会
- 2) 以降、土器の編年については三沢 薫1986『畿内古式土師器の編年と二・三の問題』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所を参考としている。
- 3) 石田茂輔1967『日業酢媛命御陵の資料について』『書陵部紀要』第19号 宮内庁書陵部
- 4) 今尾文昭1983『マエ塚古墳』『大和考古学資料目録』第11集 前期古墳資料 (1) 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館
- 5) 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査報告書第23冊 瓦谷古墳群』
- 6) 遺物ラベルには「巻之内・茅原」と記載されていたが、「巻野内」が正式な表記であるため、今回の報告では「巻野内・茅原」と記載する。
- 7) 東方仁史2003『2. 器埴輪からみた昼飯大塚古墳』『史跡 昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会

表2 縦向道路第186次出土遺物観察表

図番号	種類	素材	地区・遺構	層位	用途・他	法量 (㎜)		形状	表面	備考
						口径	高さ			
185-1	1級	瓦葺	敷板部	内面：ナツ	内面：ナツ、ヨコナツ	筒径 30.0	10.0	断面1/4の破片 内面：235×6.4 12.0×黄褐色	内面に赤色顔料	
185-2	2級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ヨコナツ、工具面 内面：ナツ、ヨコナツ、工具面	筒径 34.0	6.7	断面1/4の破片 内面：235×6.2 12.0×黄褐色	内面に赤色顔料	内面に赤色顔料を 塗らした土層に埋 没した	
185-3	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ヨコナツ 内面：ヨコナツ	筒径 33.0	5.0	断面1/4の破片 内面：235×6.4 12.0×黄褐色	内面に赤色顔料	注記通り	
185-4	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ナツ、ナツ、ヨコナツ、瓦 葺部 内面：ヨコナツ、ナツ、ナツ	筒径 30.4	13.0	断面1/4の破片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-5	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ	筒径 34.0	11.1	断面1/4の破片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-6	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ、瓦葺部内に方形網眼 内面：ナツ、ヨコナツ	最大径 12.0	最大径 16.0	断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.4 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-7	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ			断面部片 内面：185×7.4 12.0×黄褐色 内面：185×7.4 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-8	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ			断面部片 内面：185×7.4 12.0×黄褐色 内面：185×7.4 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-9	1級	瓦葺	敷板部	内面：ナツ 内面：ナツ			外壁断面部 断面部片 内面：235×6.2 12.0×黄褐色、N.3 破片 内面：70× 黄褐色、N.3 破片、235×6.2 12.0×黄褐色	内面に赤色顔料	口縁部及び赤色顔料	
185-10	1級	瓦葺	瓦葺部	内面：高直文、赤字江沢文、ナツ 内面：ヨコナツ、赤字ナツ			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-11	1級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：235×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-12	1級	瓦葺	瓦葺部	内面：高直文 内面：ナツ			断面部片 内面：235×7.3 12.0×黄褐色、235×7.3 黄褐色 内面：185×6.4 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-13	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ヨコナツ、縦割 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：185×6.4 12.0×黄褐色 内面：185×6.4 12.0×黄褐色	瓦の破片		
185-14	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ヨコナツ 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色より少し薄い 内面：185×6.2 12.0×黄褐色より少し薄い	瓦の破片		
185-15	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ヨコナツ 内面：ナツ、ヨコナツ、工具面			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色より少し薄い 内面：185×6.2 12.0×黄褐色より少し薄い	瓦の破片		
185-16	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-17	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：185×6.4 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-18	1級	瓦葺	高直文	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ	筒径 35.0	18.0	断面1/3 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：235×6.4 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-19	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色、235×6.2 12.0×黄褐色 内面：235×6.4 12.0×黄褐色	内面に赤色顔料	黄褐色	
185-20	2級	瓦葺	瓦葺部	内面：ナツ 内面：ナツ			断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.4 12.0×黄褐色	赤色顔料	注記通り	
185-21	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：高直文ナツ 内面：ナツ			断面部片 内面：185×5.1 破片	赤色顔料		
185-22	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ 内面：ナツ	12.8	5.6	1級×3.4、断面 部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色、235×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×6.2 12.0×黄褐色	赤色顔料		
185-23	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：高直文、ナツ、工具面 内面：高直文、ナツ、縦割			断面部片 断面部片 内面：235×7.6 破片 内面：235×6.4 破片	赤色顔料		
185-24	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ヨコナツ、ナツ、高直文 内面：ヨコナツ、ナツ	28.0	13.4	1級×縦割 7.6、1級 3.4 内面：185×5.2 12.0×黄褐色、N.3 破片 内面：185×5.2 12.0×黄褐色、235×6.2 12.0×黄褐色	大形瓦割片1個		
185-25	1級	瓦葺	SD-100 土層	内面：ナツ 内面：ナツ		11.0	14.2	断面部片 断面部片 内面：235×4.0 12.0×黄褐色、235×3.0 12.0×黄褐色 内面：235×2.0 破片、5.0 黄褐色	口縁部	
185-26	1級	瓦葺	SD-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ、ヨコナツ	10.2	14.7	断面部片 断面部片 内面：235×5.4 12.0×黄褐色、185×7.4 12.0×黄褐色 内面：235×6.4 破片、235×18.0、185×7.2 12.0×黄褐色	口縁部		
185-27	1級	瓦葺	SD-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ、工具面	12.9	16.0	1級×断面 部片 内面：235×6.4 破片、185×7.4 12.0×黄褐色 内面：235×6.1 黄褐色、235×6.1 12.0×黄褐色	口縁部		
185-28	1級	瓦葺	SD-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ	15.4	15.8	断面部片 断面部片 内面：7.6 破片 内面：N.3 破片	口縁部		
185-29	1級	瓦葺	SD-100 土層	内面：ナツ、高直文ナツ 内面：ナツ、ナツ	18.0	18.0	1級×断面 部片 内面：235×7.6 破片 内面：235×3.1 ナツ	口縁部		
185-30	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ 内面：ナツ、工具面	11.4	16.0	断面部片 断面部片 内面：235×6.4 12.0×黄褐色、235×3.1 18.0×黄褐色 内面：235×6.4 12.0×黄褐色、235×3.1 18.0×黄褐色	口縁部		
185-31	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：高直文、ナツ、高直文ナツ、ナツ 内面：高直文、ナツ	9.2	17.0	断面部片 断面部片 内面：185×6.2 12.0×黄褐色 内面：185×7.4 12.0×黄褐色	口縁部		
185-32	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：高直文、ナツ	11.6	21	9.8	断面部片 断面部片 内面：235×6.2 12.0×黄褐色 内面：235×6.2 12.0×黄褐色	口縁部	
185-33	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ 内面：ナツ	12.2	3.0	12.7	断面部片 断面部片 内面：185×25.4 黄褐色、235×7.4 12.0×黄褐色 内面：185×4.1 18.0×黄褐色、235×26.4 破片	口縁部	
185-34	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ、ナツ	14.0	3.8	16.8	11.8×断面 部片 内面：185×4.0 12.0×黄褐色、185×3.1 18.0×黄褐色 内面：185×4.0 12.0×黄褐色、185×3.1 18.0×黄褐色	口縁部	
185-35	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ、ナツ	18.0	18.0	18.0	11.8×断面 部片 内面：185×3.0 12.0×黄褐色より薄い 内面：185×3.0 12.0×黄褐色より薄い	口縁部	
185-36	1級	瓦葺	SK-100 土層	内面：ナツ、ナツ 内面：ナツ、ナツ	16.4	18.0	18.0	断面部片 断面部片 内面：185×3.0 12.0×黄褐色、185×3.1 12.0×黄褐色 内面：185×3.0 12.0×黄褐色、185×3.1 12.0×黄褐色	口縁部	



図番	種別	材料	地区・産地	層位	用途・集	法量 (㎡)			形状	色調	備考
						口量	底量	最高積算			
1013-38	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：ナデ、クサキ 外面：ナデ、旗ナデ	142		17.5	1層目以上、旗 部より	内面：10YR 5/3 L2-61-黄褐色 外面：10YR 3C/1-61-黄褐色、10YR 3.6黄褐色	
1013-39	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：クサキのちへろナデ、ヨコナデ 外面：ナデ、旗ナデ	160		28.1	1層目～底層 1/5、1層目 3/4	内面：10YR 4/2 黄褐色 外面：10YR 5/3 L2-61-黄褐色、10YR 4.4 黄褐色	部と同一致部あり
1013-40	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：クサキ、ナデ 外面：ナデ	42		6.0	底層100% 1/2、底層 100%	内面：2.5Y 3/1 黄褐色、10YR 4.2 黄褐色 外面：10YR 5/3 L2-61-黄褐色	部と同一致部あり
1013-41	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：クサキのみ、旗ナデ、ナデ 外面：ナデ、クサキ	32		6.7	底層～底層 中、底層 100%	内面：10YR 5/3 L2-61-黄褐色、10YR 32 褐色 外面：10YR 3/1 黄褐色	
1013-42	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：クサキのみ、クサキ、ナデ 外面：旗ナデ、旗ナデ	34		11.6	底層より～底 層100%	内面：10YR 4/3 褐色、7.5YR 2/1 褐色 外面：7.5YR 4/3 褐色、7.5YR 2/1 褐色	
1013-43	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：クサキのみ、クサキ、ナデ 外面：旗のみ、クサキのみ、旗のみ、クサキのみ、旗のみ	52		23.1	底層～底層 1/2、底層 100%	内面：7.5YR 3C/1-61-褐色、7.5YR 3C/1-61-褐色 外面：7.5YR 4/3 褐色、7.5YR 2/1 褐色	
1013-44	土留部	栗	SX-113	栗褐色砂岩	内面：ナデ、旗ナデ 外面：クサキ、旗ナデ	48		14.2	底層 1/3	内面：10YR 4C/1-61-黄褐色、10YR 2C/1-61-黄褐色 外面：10YR 3C/1-61-黄褐色より上部あり	
1013-45	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：ナデ 外面：ナデ、旗ナデ	50		14.0	底層 1/3	内面：7.5YR 6/6 褐色 外面：3Y 4/1 褐色	
1013-46	土留部	栗	SX-113 下層 土留部より	栗褐色砂岩	内面：ナデ 外面：ナデ	55		15.0	底層 100%	内面：7.5YR 6/4 L2-61-褐色 外面：10YR 6/3 L2-61-黄褐色	
1014-47	土留部	筑前産 赤い山 下層	栗褐色砂岩	栗褐色砂岩	内面：ナデ、クサキ、クサキ、クサキ、クサキ 外面：クサキ、クサキ、クサキ、クサキ	8.6	3.6	16.4	定形	内面：7.5YR 6/3 L2-61-褐色 外面：7.5YR 5/3 L2-61-黄褐色	
1014-48	土留部	栗	赤い山 下層	栗褐色砂岩	内面：ナデ、クサキ 外面：ナデ	123		14.6	1層目～底層 100%	内面：10YR 4C/1-61-黄褐色 外面：10YR 3C/1-61-黄褐色	
1014-49	土留部	二重II 層部	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：旗山 外面：クサキ	15.0		5.1	1層目～底層I 層 1/4	内面：10YR 6/4 L2-61-褐色、2.5Y 2/0 黄褐色 外面：3Y 5/1 4/1 褐色	
1014-50	土留部	栗	赤い山 下層	栗褐色砂岩	内面：ヨコナデ、クサキのみ、クサキ、クサキ 外面：ヨコナデ、クサキ、クサキ	13.8		16.5	1層目 1/4、1層目 1/4 部	内面：10YR 3C/1-61-黄褐色、10YR 3 黄褐色 外面：10YR 5/3 L2-61-黄褐色	内面は入らな
1014-51	土留部	栗	赤い山 下層	栗褐色砂岩	内面：クサキ、ナデ 外面：クサキ、クサキ	43		13.6	底層 100%	内面：7.5YR 6/6 L2-61-黄褐色 外面：7.5YR 6/6 褐色、10YR 4C/1-61-黄褐色	
1014-52	土留部	栗	赤い山 下層	栗褐色砂岩	内面：旗ナデ 外面：ナデ	43		13.1	底層のみ 100%	内面：10YR 4/4 褐色 外面：10YR 5/4 L2-61-黄褐色	
1014-53	土留部	栗	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：クサキ、クサキ、クサキ、クサキ 外面：クサキ、クサキ、クサキ	13.8		22.6	1層目～底層 1/3、1層目 1/4	内面：3YR 6/6 L2-61-褐色、3YR 6/5 褐色 外面：3YR 6/6 L2-61-褐色、3YR 6/5 褐色	古産品
1014-54	土留部	栗	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：クサキ、クサキ、クサキ、クサキ、クサキ 外面：クサキ、クサキ、クサキ	15.3		22.7	内面～底層 1層目 2/3	内面：7.5YR 6/2 L2-61-褐色 外面：7.5YR 6/2 L2-61-褐色、7.5YR 5/1 褐色	古産品
1014-55	土留部	筑前産	赤い山 下層	栗褐色砂岩	内面：クサキ、旗ナデ 外面：クサキ、旗ナデ			6.1	全層	内面：7.5YR 7/4 L2-61-褐色 外面：10YR 6/3 黄褐色	産地あり
1014-56	土留部	二重II 層部	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：クサキ 外面：クサキ	13.6		15.6	1層目～底層 1/2、1層目 1/3 部	内面：3YR 5/6 黄褐色 外面：3YR 6/6 褐色、10YR 3 黄褐色	
1014-57	土留部	栗	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：クサキ、クサキ、クサキ、クサキ 外面：クサキ、クサキ	15.0		13.2	1層目～底層 1層目 1/4	内面：7.5YR 4/4 褐色より中位あり 外面：7.5YR 4/4 褐色より中位あり	古産品の産地あり
1014-58	土留部	栗	赤い山 上層	栗褐色砂岩	内面：クサキのみ、クサキ、クサキ 外面：クサキ、クサキ	133	32	143	1層目～底層 1層目 1/3、 底層 100%	内面：10YR 5/3 黄褐色、N 3 黄褐色 外面：10YR 5/4 L2-61-黄褐色	
1014-59	土留部	下層より 上層	筑前産	栗褐色砂岩	内面：ナデ 外面：ナデ			14.1	全層	内面：10YR 6/3 黄褐色 外面：10YR 6/3 黄褐色	産地あり
1015-00	賦石	SX-104 下層								最大長 12.0 最大幅 5.7 厚さ 1.0	7.5Y 6/1 褐色
1016-01	古銅製品	SX-113 下層	栗褐色銅質土							最大長 2.8 最大幅 1.0 厚さ 0.3	10YR 5/2 オリーブ褐色

表3 巻野内・茅原出土遺物観察表

図番号	種別	種類	地区・遺構	層位	技法・色	法量 (g)		検出	色調	備考		
						口径	底径					
図30-62	磁輪	須弥形	Na2		外周 黒ナツ、ナツ 内周 黒ナツ、ナツ		49.0	46.2	1層底1/4	外周：10Y2.5/6.9 赤色、2.5Y 6.3 褐色 内周：10Y2.7/3.1 赤い褐色	黒皮あり 内周面に赤色顔料	
図30-63	磁輪	須弥形	Na2		外周 黒ナツ、ナツ 内周 黒ナツ、ナツ		41.6	43.4	1層底1/10	外周：10Y2.5/6.9 赤色 内周：10Y2.7/3.1 赤い褐色、2.5Y 5.6 褐色顔料	内周面に赤色顔料	
図30-64	磁輪	行筒Ⅱ 須弥形	Na1 Na2		外周 ナツ 内周 ナツ			46.0			外周：2.5Y 7/3 浅黄褐色 内周：2.5Y 7/3 浅黄褐色	赤色顔料 左側縁あり
図30-65	磁輪	行筒Ⅱ 須弥形	Na2		外周 ナツ 内周 ナツ			48.7			外周：2.5Y 7/3 浅黄褐色 内周：2.5Y 7/3 浅黄褐色	赤色顔料 左側縁あり
図30-66	磁輪	行筒Ⅱ 須弥形	Na2		外周 ナツ 内周 ナツ、黄オキズ			45.0			外周：2.5Y 7/3 浅黄褐色 内周：2.5Y 7/3 浅黄褐色	赤色顔料 左側縁なし
図30-67	磁輪	須弥	Na2		外周 赤黒文、ナツ 内周 ナツ			41.0			外周：5YR 7/4 赤い褐色 内周：5YR 7/6 褐色	内周面に赤色顔料
図30-68	磁輪	須弥	Na2		外周 赤黒文、ナツ 内周 ナツ			44.4			外周：2.5Y 7/3 浅黄褐色 内周：2.5Y 7/3 浅黄褐色	内周面に赤色顔料
図30-69	土師器	小型丸 底鉢	Na1		外周：1.0 赤 内周：1.0 赤、1.0 赤		11.0	13.0	1層底1/4	外周：7.5YR 6/2 赤い褐色 内周：7.5YR 6/4 赤い褐色	横付者	
図30-70	土師器	小型丸 底鉢	Na1		外周：1.0 赤、マメツ 内周：ナツ、工具痕		11.4	13.7	1層底1/20 経+縁底1/6	外周：7.5YR 5/3 赤い褐色 内周：7.5YR 6/4 赤い褐色		
図30-71	土師器	小型丸 底鉢	Na1		外周：1.0 赤、マメツ 内周：マメツ		12.4	15.1	1層底1/6	外周：10Y2.6/2 赤褐色 内周：2.5Y 6/2 赤い褐色		
図30-72	土師器	高円	Na1		外周：1.0 赤 内周：1.0 赤、黒土		21.8	13.0	1層底20% 1層底1/10	外周：7.5YR 6/2 赤褐色、7.5YR 4.1 褐色 内周：7.5YR 6/3 赤褐色、7.5YR 3.1 褐色	横付者	
図30-73	土師器	器内	Na2		外周：マメツ 内周：マメツ		11.0	12.7	1層1/16	外周：7.5YR 7/4 赤い褐色、7.5YR 5/4 赤い褐色 内周：7.5YR 7/4 赤い褐色、7.5YR 5/3 赤い褐色		
図30-74	土師器	壺	Na1		外周 ナツ 内周 ナツ、マメツ		12.6	13.2	1層底1/4	外周：7.5YR 5/3 赤い褐色 内周：7.5YR 4/2 赤褐色、7.5YR 6/4 赤い褐色	横付者	
図30-75	土師器	浅鉢形	Na2		外周 マメツ 内周 マメツ		20.0	10.1	1層底1/8	外周：7.5YR 7/4 赤い褐色 内周：7.5YR 6/4 赤い褐色		

## 第2節 脇本遺跡第22次発掘調査報告

### 1. はじめに

脇本遺跡第22次調査は、大字脇本423-3で個人住宅の建築工事に先立って行われた調査である。脇本遺跡は、三輪山と外鎌山に挟まれた初瀬谷の西端部、初瀬川の北河岸段丘に位置する弥生時代から飛鳥時代を中心とした集落遺跡で周囲には黒崎遺跡、城島遺跡があり、初瀬川を挟んで南側には外鎌山古墳群が展開している。

近年の調査の成果によって5世紀後半から7世紀の掘立柱建物や櫓の跡が確認されており、このうち5世紀後半については雄略天皇の「泊瀬朝倉宮」と、7世紀後半については大泊皇女の「泊瀬斎宮」などの「日本書紀」記載の記事との関連が指摘されている<sup>1)</sup>。他にも本調査地に隣接している第13次調査<sup>2)</sup>では、弥生時代後期から庄内期の竪穴住居を9棟、掘立柱建物を3棟など複数の遺構を検出し、遺物も銅鐸片や青銅器片などの铸造関係遺物を確認し、弥生から古墳時代への過渡期の集落遺跡として注目されている<sup>3)</sup>。今回の調査では、第13次調査に近接していることもあり、竪穴住居や青銅器铸造関連遺物を検出されることが期待された。

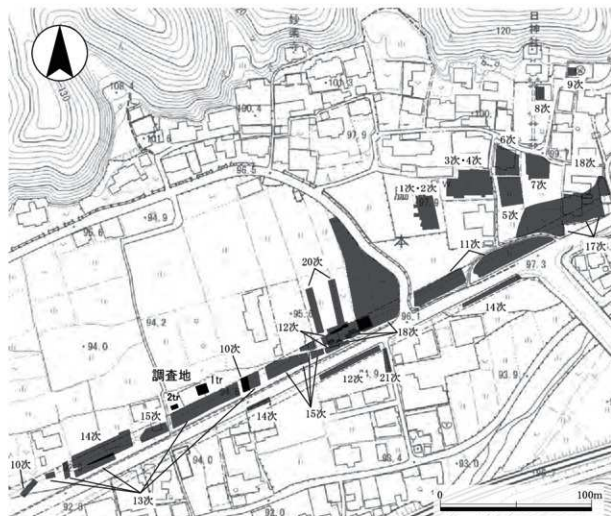


図21 脇本遺跡第22次調査地位置図 (S=1/2,500)

## 2. 調査方法と基本層序

### (1) 調査方法

調査地は、かつて建物が存在していたが、平成19年以降の国道165号拡張に際して建物を撤去し空き地となっていたようである。そのため旧建物にともなう現代整地土が厚く堆積していたので、旧耕作土を含めて重機により除去し、その後人力により調査をおこなった。当初、調査トレンチ（第1トレンチ）を7m×7mで設定したが、北側に旧建物の基礎等やその撤去跡が後述する地山層（Ⅳ層）の深度以上にまで達していたため、北側の一部を縮小し、南北5m×東西7mの調査面積35㎡となった。また、浄化槽が設置される箇所についても南北2m×東西3m、調査面積6㎡の第2トレンチを設定している。

なお、調査期間は平成29年5月22日から6月19日である。

### (2) 基本層序

第1トレンチの基本層序は、上からⅠ現代整地土（2～8層 層厚約30cm）、Ⅱ旧耕作土（9～11層 層厚約15cm）、Ⅲ橙色シルト～極細粒砂層（21層 層厚20cm）、Ⅳ橙色シルト～極細粒砂層（56層 層厚25cm）、Ⅴ灰白粗粒砂礫層（57層）の順となる。Ⅲ層は、弥生時代後期もしくは庄内式土器を中心とした遺物を包含する層であるが、少量のため正確な堆積時期は確定できない。Ⅳ層は、遺構の構築面となる基盤層となる層で、調査区内では遺物を包含していなかった。Ⅴ層も同じく遺物は確認できなかったため地山層としている。

第2トレンチも、標高や堆積状況から、基本的に第1トレンチと同じ層序となると思われる。断面図(図22)との対応関係は、Ⅰ層（現代整地土 1層）、Ⅱ層（現代水田耕作土層 2・3層）、Ⅲ層（包含層か 4層）、Ⅳ層（地山層 10・11層）となる。こちらも1トレンチと同様に第Ⅳ層上面で遺構検出をおこなっている。なお、この基本層序はすぐ南側でおこなわれた臨本遺跡第13次調査の成果と同様な傾向で、同じ堆積状況だと考えられる。

## 3. 主な検出遺構

各トレンチのⅣ層上面で検出した主要な遺構について、下記に述べる。

### (1) 第1トレンチ

**SP102・SP126** SP102は、調査区中央に位置する直径約1m、深さ約30cmの柱穴で、掘方の中心付近には柱の抜取痕が確認できた。重複する遺構SK116やSX127の中では、検出状況から最も新しい遺構と判断できる。SP102と関連する可能性としてSP126と南壁土層の22・23層がある。両者とも正確な平面形をつかめなかったのでSP102と同一構造物を構成するとは断定はできないが、検出位置から有力な組み合わせといえる。これらの柱穴が一連のものとすれば、柱穴間は芯々間で約2m、柱穴群の主軸はN-20° - W前後となる。



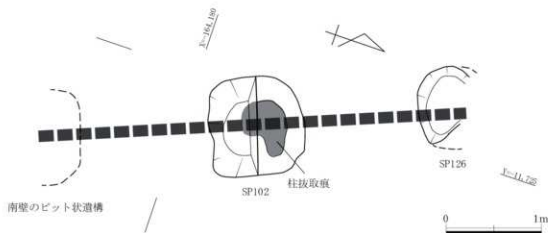


図23 SP102・SP126など (S=1/40)

**SK103** 調査区西側に位置する直径約65cm、深さ約10cmのピット状の遺構で、遺構埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。柱穴跡の可能性はあるが、周囲に一連となるものが存在していないので土坑としておく。遺物は土師器が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

**SK104** 調査区南側に位置する直径約80cm、短径約40cm、深さ約35cmのやや不整形な楕円形の土坑である。検出状況から重複するSD106より新しい遺構だと考えられる。遺物は土師器が出土しているが、細片のため詳しい時期は不明である。

**SD106** 調査区南西に位置する幅約60cm、深さ約25cmの溝で、遺構埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。遺物は細片のため時期は不明である。

**SP107** 直径約35cm、深さ約20cmの円形をしたピットでSP124のすぐ南側にある。

**SP108** 直径約30cm、深さ約35cmの円形をしたピットである。SX127と重複しており、検出状況からSP108が新しい遺構だといえる。

**SX113** 調査区南端で落ち込みの一部を確認した。遺構検出する前に南壁沿いに断割りをいれたため、正確な平面形をとられなかったが、埋土の痕跡や南壁断面の状況から方形をしている可能性がある。

**SX114 (SP117)** 調査区北西に位置する幅1.2m以上、深さ約80cmの落ち込みで、遺構埋土は灰黄褐色シルトで、上下2層に分層できる。検出した平面形が直線的なので、方形もしくは矩形の可能性はあるが、遺構埋土のほとんどが調査区外に続くので、遺構の全体像は明らかでない。遺物は土師器が出土しているが、細片のため詳しい時期は不明である。なお、SX114の上層埋土(34層)を除去した時点で、調査区の北西隅でSP117を検出したので、SX114に伴う遺構だと考えられる。SP117は、直径約40cm、深さは約45cm程度の規模と思われる。

**SX115 (SD119・123・SP122・125 SK120)** 調査区中央に位置する深さ約13cmの直線的な肩のラインをもつ落ち込みで、南北長4.1m以上、東西幅は3m以上ある。遺構埋土は、上層にはぶい灰黄褐色極細粒砂、下層は黄褐色シルトにぶい黄橙シルトブロックが混じるものであった。上層を除去したあと、肩に沿うように幅約45cm、深さ10cm程度のSD119や、幅30cm、深さ10cm程度のSD123の

ような小溝を検出している。その他にも、直径約1.1m、深さ約15cmのSK120、直径約40cmのSP122、直径40cm程度のSP125などが平面的にSX115内で検出された。この3つの遺構に関しては、攪乱が検出面まで及んでいたところで検出されたため、SX115の上層埋土との前後関係は確認できなかった。

**SK116A・B** 調査区中央から南側にかけて広がる不定形な土坑であった。当初は一体の土坑としてとらえていたが、遺構の深さのピークが2か所あったので、円形に近い土坑が2つあったと考え、SK116A・Bに分けて記述する。SK116Aとしたものは、直径約1.5m、深さ約35cmで、南半は調査区外となる。土坑の底部付近からは甕がほぼ完形の状態出土している（図版16）。SK116Bは、直径約1.1m、深さ約30cmで、北側の一部はSP102の掘方に削平されている。

**SK121** 調査区の西端にみられた不定形な土坑である。遺構の大半は調査区外に広がるので全容はわからない。SX115の上層埋土を切り込んで土坑が掘削されているので、SX115より新しい遺構だと考えられる。

**SK124** 長径約70cm、短径約55cm、深さは西側で10cm程度、東側で30cm程度の楕円形をした土坑である。東側が一段低くなっているが、柱痕なのか判別できなかったので土坑としておく。

**SX127 (SD128 SK129・130)** 調査区中央に位置する深さ約30cmの落ち込みである。直線的なラインとコーナーが検出されたので1辺2.8m以上の方形または、矩形的の遺構の可能性がある。遺構内にはSK116A・BやSP102、SX115などのSX127埋没後に掘削された遺構があり、埋土の層位のつながりを観察しにくくなっているが、上層には黄橙色シルト、下層に黄色シルトとなる。下層埋土と地山

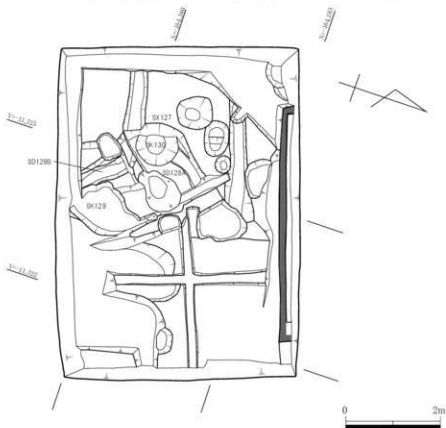


図24 第1トレンチ SX127掘削後の平面図 (S=1/80)

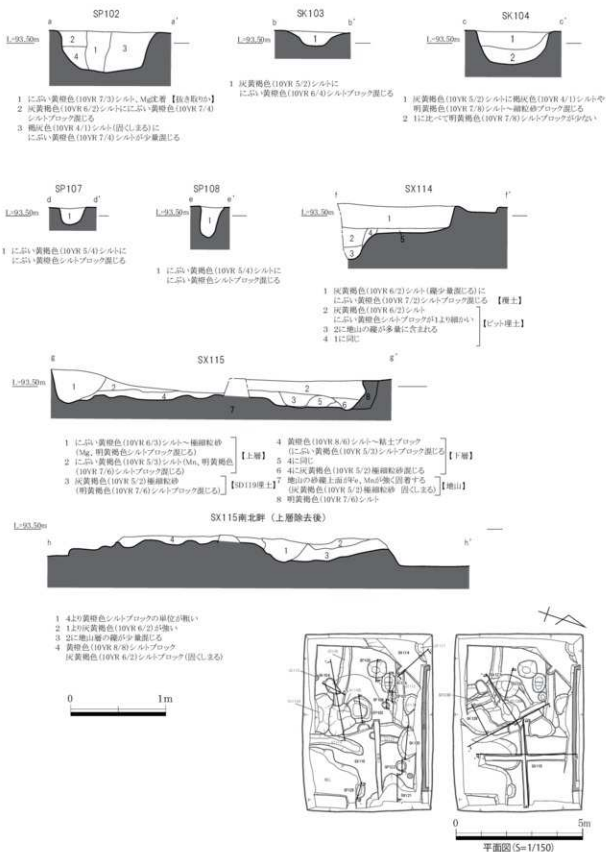


図25 遺構断面図① (S=1/40)



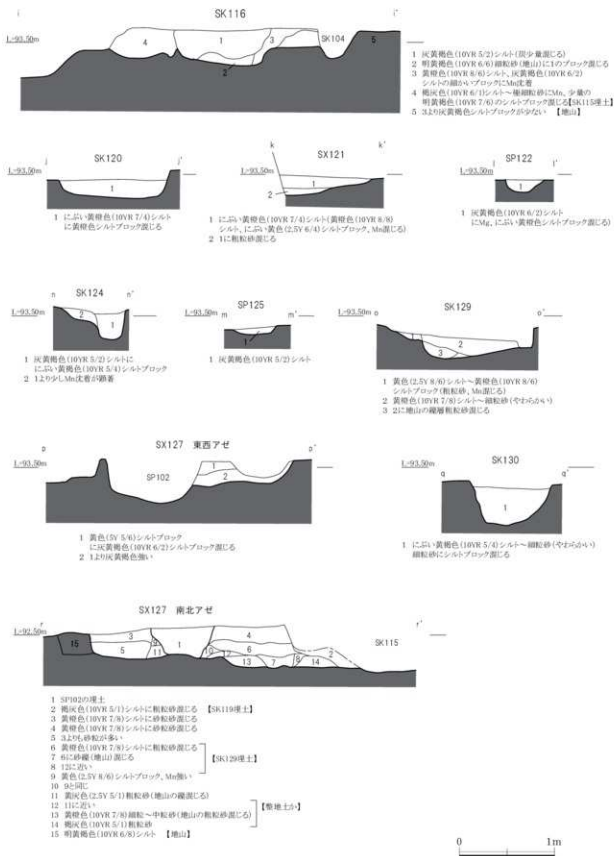


図26 遺構断面図② (S=1/40)

層との間に堆積する層（図22—11～14層など）は、SX127に伴う堆積層か下層遺構なのかは判断できなかった。上層の埋土を除去したあと、遺構の肩に沿う形で、幅約25cm、深さ約7cmのSD128を検出している。また、東端には長径約1.6m、短径約1m深さ約20cmのSK129、西隅には直径約83cm、深さ約40cmのSK130を検出している。いずれもSX127に関連する遺構の可能性が高い。

SX127内は、後世の遺構により削平されている部分が多いため、上部構造を支える柱穴や確認できないことや遺構内で検出された土坑などの位置づけが不明瞭な点が、堅穴住居とするには疑問点が残るものの、SX127の平面形が、方形をとること、上層埋土除去後に肩にそって小溝が検出されているので、これを壁溝とした堅穴住居の可能性が考えられる。

（丹羽）

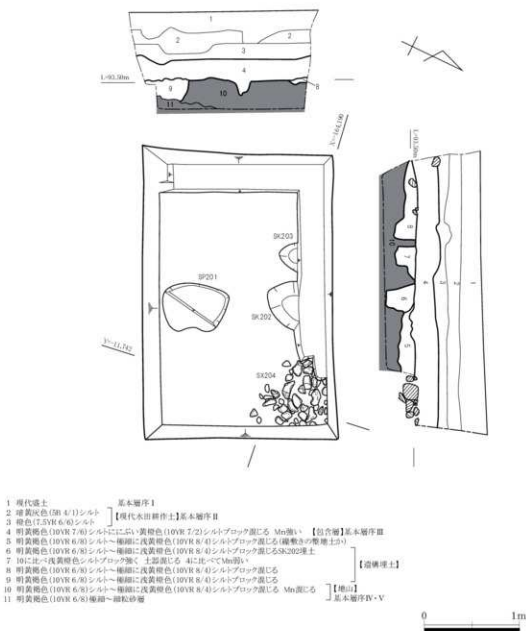


図27 第2トレンチ平面・断面図(S=1/40)

## (2) 第2トレンチ

第2トレンチにおいてもⅣ層上面で遺構検出を目指した。調査区の東隅で石が集中して検出されたSX204や、ピットや土坑状の遺構が検出された。SX204以外は、いずれも10～20cm程度の深さのものであり、狭小な調査区ということもあって遺構の性格を明らかにすることはできなかった。以下、SX204について詳述する。

**SX204** 調査区北東隅に80cm×60cmの範囲に直径15cm程度の石が集中して検出された。平面では確認できなかったが、断面より石の集中部より一回り広い深さ15cmの浅い落ち込みが確認できた。この落ち込みに表面を水平にするように石を据えているように見え、敷石の可能性がある。検出範囲が狭かったため、どのような性格のものかを特定することはできなかった。遺物が確認できなかったため、時期は不明である。

## 4. 出土遺物

### (1) 第1トレンチ

(1)はSP102で出土した土師器高杯の坏部片と思われる。調整はマメツにより不鮮明ではあるが、外内面ともに縦ミガキ調整の痕跡が薄く残っている。(2)はSD106から出土した土師器甕底部の破片で、外面の底部端までタキ調整が施されており、内面の底部にはハケ調整の工具痕が残っている。

(3～10)はSX114から出土したものを図示している。(3)は土師器壺の口縁部片で、内外面にミガキ調整が施されている。(4)にも同じく内外面にミガキ調整が施されているが、(3)よりも口縁部が大きく外反している。(5～9)は土師器甕の口縁部片である。(6・7)は推測される法量や色調が近似していることから、同一個体の可能性がある。(9)は口縁部のみで、外内面ともにヨコナデ調整である。(10)は土師器底部で、内面はハケ調整である。

(11～15)はSX115から出土したものを図示している。(11)は広口壺で、外反する口縁～頸部にかけての破片である。外面頸部には刻み目、内面の口縁部には波状文が施されている。口縁端部は垂下部が剥がれていたため部分的にしか確認できないが、波状文を刻んだあと、竹管浮文を付しているようにみえる。竹管浮文の間に、波状文の上半のピークが3つくるような間隔で浮文を規則的に施したものと考えられる。(12)口縁部から頸部にかけて大きく外反する土師器壺片である。(13)は土師器高杯の坏部片で、外内面にミガキ調整が施されているが、マメツや土器に鉄分が付着しているため鮮明ではない。(14・15)は土師器の底部片で、(14)は外面にはタテ方向のミガキ調整、内面にはヨコ方向のミガキ調整が施されている。(15)は外面にユビオサエ痕が確認できる。

(16～19)はSK116から出土したものを図示している。そのうち(17)はSK116Aから、(18)はSK116Bからと出土位置を特定できている。(16)は土師器壺の口縁部片で、口頸部は短く外反している。(17・18)は土師器甕である。(17)はほぼ完形のもので、外面にハケのちナデ調整が確認できる。(18)は土師器の口縁部片で、内面の一部にハケメが施されている。

(20) SP117から出土した小型器台の裾部片で、外面にはミガキ調整が施されているが、所々剥離し

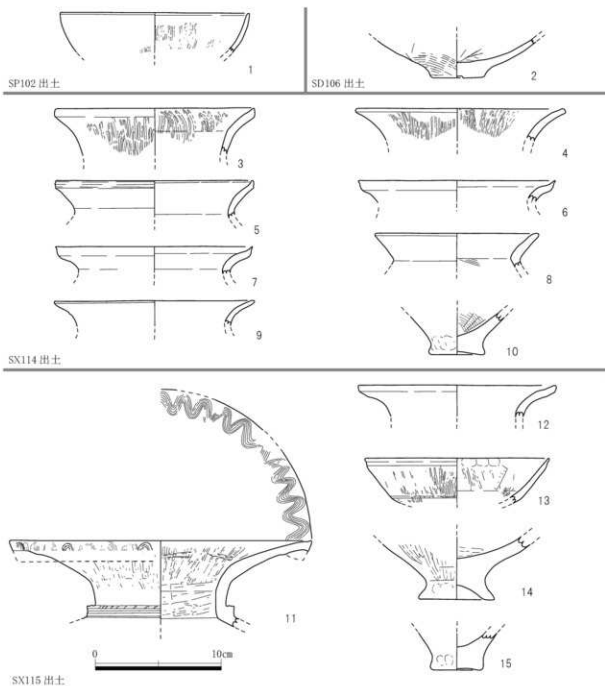


図28 出土遺物① (S=1/3)

ている。(21) SK121から出土した土師器底部でマメツにより不鮮明ではあるが、内面にハケメ調整が確認できる。

(22~30)はSX127から出土したものを図示している。(22)は、土師器壺の口縁部片である。外面と内面の両方にミガキ調整が確認できる。(23~25)は土師器甕の口縁部片である。(26・27)は土師器高坏の坏部で、推測される法量や色調が近似していることから、同一個体の可能性もある。(28)は土師器底部で、外面の底部付近までタタキ調整が施されている。また内面にもハケの工具痕だと考えられるものが確認できる。(29)は手埴り形土器の覆部~口縁部で、外面の覆部にはハケメ調整があ

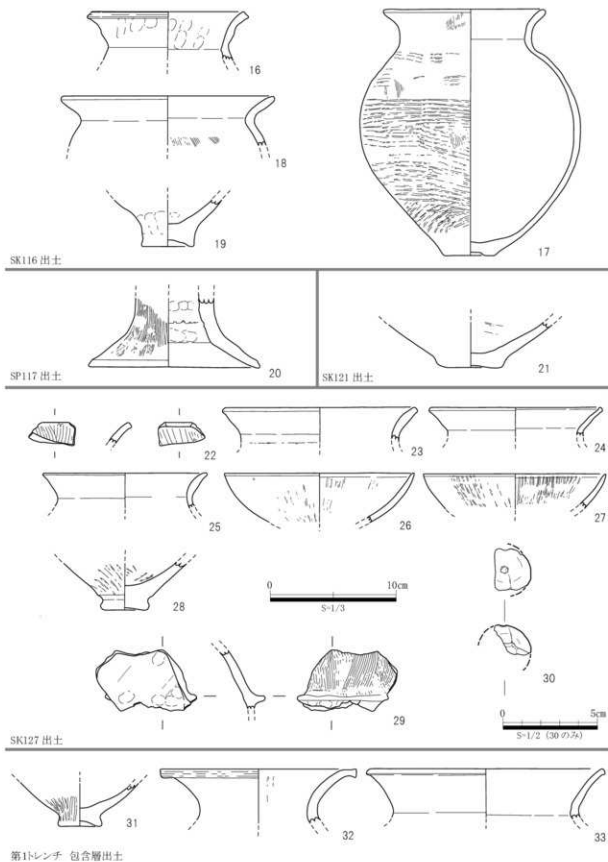


図29 出土遺物② (S=1/3・30のみS=1/2)

り、内面にはナデや工具痕のようなものが確認できる。(30)は縦2.3cm、横1.3cm残存している丸みを帯びた形の土製品である。正円の球体であれば直径3cm程度と考えられるが、復元形を推定するのは難しい。球体の中心に直径3mmの円形の凹みがある。どのような用途をもつ土製品なのかは不明である。

(31)は第1トレンチ西壁断面から出土した土師器底部で、底部が突出し大きく外反する形をしている。外面にはミガキ調整が確認できる。(32・33)は包含層から出土したものである。(32)は土師器壺で、口縁部が大きく外反する。外面にミガキ調整が施されているが、マメツのため不鮮明である。(33)は土師器甕で口縁部が緩やかに外反する。

## (2) 第2トレンチ出土遺物

(34)はSK202から出土した土師器高坏の坏部から脚部片で、外内面ともにナデ調整である。(35)はSK203から出土した土師器底部の破片である。表面がマメツしているが、外面にタタキが施されているのが確認できる。

(36~40)は包含層から出土したものを図示している。(36)は二重口縁壺の口縁部で、全面にヨコナデ調整が施され、外面に粘土紐の痕跡がある。(37~39)は土師器甕の口縁部である。(37)は頸部付近にタタキ調整が施されているが、マメツのため不鮮明である。(39)は外面の頸部から体部にかけてタタキ調整が施されているが、マメツのため不鮮明である。また内部には接合痕と思われる痕跡が確認できる。(40)は土師器高坏である。外面内面ともにマメツがひどく、調整を確認できない。

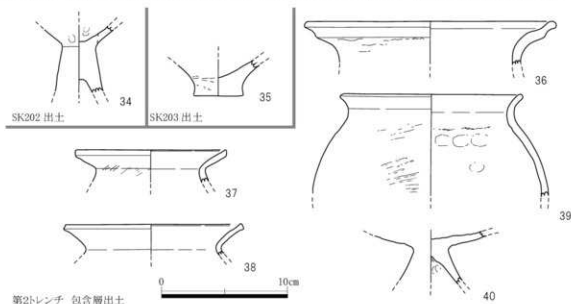


図30 出土遺物③ (S=1/3)

第1トレンチや第2トレンチとも小片のものが多く、遺物の詳細な時期決定は困難であるが、土師の形状などから弥生時代後期末から庄内期古相の時期におさまるものと考えられる。それぞれの出土した遺構の埋没時期もこの時期に該当するものだと考えられる。(藤村)

## 5. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半～庄内期古相を中心とした遺構を検出した。特に第1トレンチで検出した方SX127は、上層埋土を除去したあとに、遺構の肩沿いに小溝を検出し、住居跡の可能性が考えられる。その他にも、SX114やSX115も上層埋土除去後に小溝や柱穴などが検出され、堅穴住居遺構の候補となるが、こちらに関しては、住居に伴う周壁溝や柱穴とするには、やや不規則であること、遺構の全体像が確認できなかったことも含めて、堅穴住居とするには疑問点も残る結果となった。

いずれにしても、今回の調査区に隣接する第13次調査検出された弥生時代後期後半から庄内期と思われる堅穴住居を中心とした集落域が本調査区まで広がっていた可能性が高いといえる。ただ、第13次調査で発見された青銅器鋳造関連遺物は今回の調査では確認できておらず、集落内において、青銅器製品を製作していた工房エリアが今回の範囲まで広がっていたかは不明である。集落内の詳細な構造については、今後の課題である。(丹羽)

### 【註記】

- 1) 井上主税編2014『脇本遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第115冊 奈良県立橿原考古学研究所  
岡田雅彦編2015『脇本遺跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第118冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 2) 光石明巳編2011『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第109冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 3) 北井利幸2009『脇本遺跡の青銅器鋳造関連遺跡の青銅器鋳造関係遺物』『銅鐸—弥生時代の青銅器—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

表4 脇本遺跡第22次調査 出土土物観察表

調査番号	方名	遺構	遺物	遺量 (cc)			検出	遺物名など	色調
				口蓋 (埋土)	底蓋 (埋土)	蓋裏 (埋土)			
0027-1	I	SX102	高坪	13.0	13.0	13.0	13.0	1.9	外側：237.9 6.6 褐色 内側：237.9 6.6 褐色
0027-2	I	SX106	高坪	3.8	13.1	高坪 高坪			外側：237.9 7.6 褐色 内側：237.9 7.6 褐色
0027-3	I	SX114	池	10.7	12.7	13.0	1.7		外側：307.9 6.2 灰青色 内側：307.9 6.2 灰青色
0027-4	I	SX114	池	16.0	12.0	13.0	1.9		外側：237.9 6.4 12.0+褐色 内側：237.9 6.4 12.0+褐色
0027-5	I	SX114	池	13.0	13.0	13.0	1.1		外側：307.9 7.0 12.0+褐色 内側：307.9 7.0 12.0+褐色
0027-6	I	SX114	池	13.0	12.7	13.0	1.20		外側：237.9 6.4 12.0+褐色 内側：237.9 6.2 灰褐色
0027-7	I	SX114	池	13.0	12.3	13.0	1.14		外側：237.9 6.4 12.0+褐色 内側：237.9 6.4 灰褐色
0027-8	I	SX114	池	13.0	12.0	13.0	1.9		外側：337.9 3.9 褐色 内側：337.9 3.9 褐色
0027-9	I	SX114	池	13.0	12.3	13.0	1.14		外側：337.9 6.6 褐色 内側：337.9 6.6 褐色
0027-10	I	SX114	池底部分	4.2	12.0	高坪 高坪			外側：337.9 3.9 褐色 内側：337.9 7.6 褐色
0027-11	I	SX115	高坪	12.0		14.0	13.0	1.4	外側：237.9 7.4 12.0+褐色 内側：237.9 7.4 12.0+褐色
0027-12	I	SX115	池	13.0	12.4	13.0	1.6		外側：237.9 6.1 褐色 内側：237.9 5.3 12.0+褐色
0027-13	I	SX115	高坪	14.7	13.0	13.0	1.4		外側：107.9 6.3 12.0+褐色 内側：107.9 6.3 12.0+褐色
0027-14	I	SX115	池底部分	4.0	12.0	高坪 高坪			外側：337.9 3.4 12.0+褐色 内側：337.9 3.2 灰褐色
0027-15	I	SX115	池底部分	3.8	12.0	高坪 高坪			外側：107.9 7.0 12.0+褐色 内側：107.9 7.0 12.0+褐色
0028-16	I	SK130	池	12.0	3.9		1.7		外側：337.9 6.4 12.0+褐色 内側：337.9 6.6 褐色
0028-17	I	SK130A	池	11.9	3.9	10.6	12.12		外側：237.9 1.9 褐色 内側：237.9 1.9 褐色
0028-18	I	SK130B	池	10.0	14.0	13.0	1.9		外側：337.9 6.3 12.0+褐色 内側：337.9 6.2 12.0+褐色

図番号	名称	用途	規格	流量 (㎧)			残存	異動方法	色調
				口徑 (管径)	流量 (管径)	最高 (管径)			
HDH-19	1	SK116	高圧		4.0	(3.7)	低残 全消	汚濁 : ヌビナナ 内濁 : ナナ	汚濁 : 7.5V 6.6 褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-20	1	SP117	小管器台		14.6	(5.5)	低残 全消	汚濁 : エダホ 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 3.5V 4.2 灰褐色 内濁 : 3.5V 3.2 灰褐色
HDH-21	1	SK122	単気筒		5.0	3.6	低残 全消	汚濁 : ナナ 内濁 : ナナ、ナナ	汚濁 : 10.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 10.5V 6.4 12.0V-褐色
HDH-22	1	SK127	巻	(12.0)		不明		汚濁 : エダホ (1.5線部) 内濁 : エダホ (1.5線部)	汚濁 : 3.5V 6.6 褐色 内濁 : 3.5V 6.6 褐色
HDH-23	1	SK127	巻	(12.0)	(12.0)	1.00 1.5		汚濁 : ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 3.5V 3.6 褐色 内濁 : 3.5V 3.6 褐色
HDH-24	1	SK127	巻	(13.0)	(12.7)	1.00 1.10		汚濁 : ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 2.5V 7.2 灰褐色 内濁 : 2.5V 7.2 灰褐色
HDH-25	1	SK127	巻	(13.0)	(12.3)	1.00 1.10		汚濁 : ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.6 褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-26	1	SK127	高圧	(13.0)	(13.0)	1.00 1.3		汚濁 : エダホ、ナナ 内濁 : エダホ、ナナ	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-27	1	SK127	高圧	(14.0)	(13.0)	1.00 1.10		汚濁 : エダホ (1.5線部)、ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : エダホ (1.5線部)、ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-28	1	SK127	巻気筒小	3.4	(3.0)	低残 全消		汚濁 : ナナホ (1.5線部)、ナナ (1.5線部) 内濁 : エダホ	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色
HDH-29	1	SK127	手動巻上げ器	(16.0)		不明		汚濁 : ナナホ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ、ナナ	汚濁 : 10.5V 7.2 12.0V-褐色 内濁 : 10.5V 7.2 12.0V-褐色
HDH-30	1	SK127	土製品 ナナ (1.5)	ナナ (1.5)		不明 1.4		ナナ	10YV 6.2 灰褐色
HDH-31	1	気筒巻	巻気筒小	3.4	(3.4)	低残 1.2		汚濁 : エダホ 内濁 : ナナ	汚濁 : 3.5V 6.6 褐色 内濁 : 3.5V 5.4 12.0V-褐色
HDH-32	1	気筒巻	巻	(13.0)		1.00 1.6		汚濁 : エダホホ 巻気筒のたけ不明 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色
HDH-33	1	気筒巻	巻	(16.0)		1.00 1.5		汚濁 : ヌビナナ 内濁 : ヌビナナ	汚濁 : 10.5V 6.3 12.0V-褐色 内濁 : 10.5V 6.3 12.0V-褐色
HDH-34	2	SK202	高圧	(13.7)	(13.3)	低残 全消		汚濁 : ナナ 内濁 : ナナ	汚濁 : 10.5V 6.2 灰褐色 内濁 : 10.5V 6.2 灰褐色
HDH-35	2	SK202	巻	3.6	(3.0)	低残 1.2		汚濁 : ナナホ (1.5線部)、ナナ 内濁 : ナナ	汚濁 : 10.5V 5.2 灰褐色-6.4 12.0V-褐色 内濁 : 10.5V 7.2 12.0V-褐色
HDH-36	2	気筒巻	二重1.5線巻	(19.0)	(13.0)	1.00 3.5		汚濁 : ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色
HDH-37	2	気筒巻	巻	(12.0)	(12.0)	1.00 1.5		汚濁 : ナナホ (1.5線部)、ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.2 灰褐色 内濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色
HDH-38	2	気筒巻	巻	(13.0)	(12.0)	1.00 1.6		汚濁 : ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 6.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-39	2	気筒巻	巻	(14.0)	(13.3)	1.00 1.6		汚濁 : ナナホ (1.5線部)、ヌビナナ (1.5線部) 内濁 : ヌビナナ (1.5線部)、ナナ (1.5線部)	汚濁 : 7.5V 5.4 12.0V-褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色
HDH-40	2	気筒巻	高圧	(13.0)		1.00 全消		汚濁 : ナナ 内濁 : ナナ	汚濁 : 7.5V 6.6 褐色 内濁 : 7.5V 6.6 褐色



### 第三章 二反田古墳の検討

#### 1. はじめに

二反田古墳は、桜井市大字大豆越に所在する一辺約20m、高さ約2mの高まりが残る古墳である。平成27年度におこなわれた縦向遺跡第186次（二反田古墳第1次）調査<sup>1)</sup>では、墳丘の西側にトレンチを3箇所設定し調査をおこなった。調査の結果、良好な状態の葺石が第1・2トレンチで検出されており、墳丘の裾を確認している。周濠埋土からは、多くの埴輪が出土しており、その埴輪の時期から二反田古墳の築造は古墳時代前期中葉ごろであると考えられる。

このような発掘調査の成果から、二反田古墳は一辺30m以上の方形を呈した古墳であることがわかってはいるが、墳形の確定には至っていない。そのため天理大学に依頼し、墳丘の南側で物理探査をおこなうことになった。

また、すでに縦向遺跡第186次調査の報告書は刊行しているが、その中で報告している踏付栴檀筒埴輪の形態について報告書作成当時には至らない点が多く、様々なご指摘をいただいた。今回は、ご指摘いただいた埴輪の形態について再度検討し報告する。

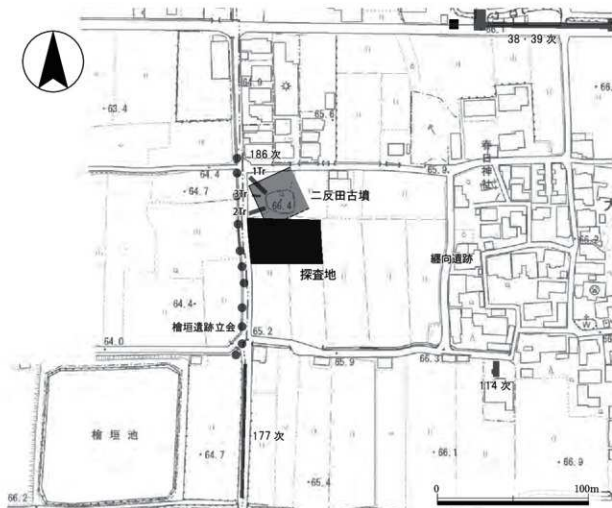


図31 二反田古墳位置図 (S=1/2,500)

## 2. 二反田古墳における物理探査

### (1) 調査の目的

二反田古墳は、先述している通り平成27年度に、墳丘の西から北西にかけて3箇所のトレンチを設けて発掘調査がおこなわれており、現在の墳丘から離れた位置に葺石および基底石を確認している。それらの配置から、墳丘は北から約25°西に振る主軸をもつ方形を呈することが分かり、発掘調査ではその北辺および西辺の一部を確認したこととなる。墳端の標高は墳丘北側の第1トレンチ、西側の第2トレンチともに約62.7mであり、発掘時の地表である耕作土上面から約1.5mの深さに位置した。また葺石の最も高い箇所の標高は約63.6mであり、地表から約0.5mの深さに当たる。

墳丘が方形であることと、築造時期が古墳時代前期中葉頃と比較的早いことから考えて、本墳は方墳である可能性とともに、あるいはそれ以上に前方後方墳である可能性を考慮すべきである。また、現在残る方形主丘の北辺と西辺の位置は確認されたが、南辺と東辺は未確認であり、その辺長も不明である。

以上から、物理探査においては、①方形主丘の規模の追究、②前方部の存否およびその位置・規模の追究が課題となる。

### (2) 調査の概要

調査は、桜井市教育委員会の依頼を受けておこなったものである。日程・体制を次に示す。

調査日：2017年12月23・26日

調査員：小田木治太郎・岸田 徹

調査補助員：上中浩希・田村 翔・吉田芽依・緒形侑美・川上見生・久保田環・巽 優貴・藤本佳奈・大川泰輝・大上拓人・阪口 壮・志村直治郎・多田健悟・辻本有哉・寺尾翼・中 優作・中村壮秀・野村日陽里・山村 綾

物理探査は現在残る墳丘の周囲全面でおこなうのが望ましいが、北側は駐車場として埋め立てられ、東側・西側は畑地であり年中植え付け中のためおこなえない。南側の水田である箇所は、冬の休耕中におこなうことができた。

なお、この調査は天理大学の「考古学・民俗学特講1文化財探査」の授業を兼ねた。

### (3) 探査の概要

地中レーダ探査および電気比抵抗探査に使用した機器は、天理大学考古学・民俗学研究室所有のSIR-3000およびHandy-ARMである。

二反田古墳の南側に、南西隅を探査区原点(0.0)とする東西45m、南北36mの探査区を設定した。なお、探査区の基準とした杭は、近傍の基準点を元に国土座標を取得しており、探査結果は正確に位置合わせが可能となっている(表5)。探査区は中央に南北方向の畦があり、その東西で地表面に高低差があった。そのため一度に全面を探査することが難しく、畦を基準に東西2区に分けて(東区、

西区)個別に探査をおこなうこととした。

地中レーダ探査は、比較的深部まで探査可能な200MHzアンテナを使用し、測線間隔0.5mで走査した。測線方向は南-北方向を基準としているが、周濠の存在が予想される探査区の北半部分については、取得データを密にするため東-西方向測線も設定した(図32)。

電気比抵抗探査は、東区の任意の箇所に探査グリッドに沿う形で計4本の測線を設定した。電極配置はウェンナー法を採用し、最小電極間隔1mとし1m単位で最大8mまで電極間隔を広げ地下の電気比抵抗断面図を作成した。

西区は、前日の降雨により地表面に水が溜まっている状態であった。このような場合、電極棒により人為的に地中に流された電流の大部分は地表の含水率の高い箇所を流れ、深部の状況がデータに反映されない。そのため、西区では電気比抵抗探査は実施しなかった。

#### (4) 地中レーダ探査の結果

図33に西区における地中レーダ探査結果(タイムスライス図)を示す。同図は、ある深度幅における異常応答の平面分布を示すものであり、今回は深度幅約0.3m毎で解析をおこなった。

深度10-19ns(推定深度:29-57cm)、深度19-29ns(推定深度:57-86cm)ではY=13mラインに沿って東西に異常応答が延びているが、同箇所は水田の畦が存在しており、この畦による異常を捉えたものである。これとは別に、探査区の北東隅にまとまった異常応答が認められた。同箇所を通る測線(NTD\_039、X=19m)のGPRプロファイル(図34、測線位置は図36に示す)では、地表からの推定深度120cm~60cm、Y=29~35mにかけて北上がりの構造が認められた。これは墳丘の裾部分を捉えたものと考えられる。同探査箇所の地表面の標高は64.29mであり、墳丘裾部を捉えたと考えられる反射面の推定標高は単純計算で63.09m~63.69mとなる。発掘調査で確認された墳端の標高(約62.7m)と葺石の最も高い箇所の標高(約63.6m)と比較すると、探査結果では墳端の標高が0.4m程度高くなっている。これは、地表下120cm以深の反射波が捉えられなかったという探査機器の限界によるものとも考えられるが、今回の地中レーダ探査における推定深度はあくまで目安に過ぎず、多少の誤差を含んでいることは考慮しなくてはならない。

また、周濠の南端は残念ながら今回の探査では認められなかった。これは葺石や盛土が存在しない周濠南端は、明瞭な反射面を持たないため、地中レーダ探査での検出が困難であったと考えられる。

表5 基準点一覧(第6系)

	点名	X座標	Y座標
探査基準杭	(0,0)	-15422.228	-160835.315
	(0,36)	-15423.858	-160799.347
	(23,0)	-15399.245	-160834.264
	(23,36)	-15400.886	-160798.291
	(25,0)	-15397.247	-160834.169
	(25,36)	-15398.88	-160798.201
	(45,0)	-15377.277	-160833.268
	(45,36)	-15378.904	-160797.308



図32 探査測線図 (S=1/600)

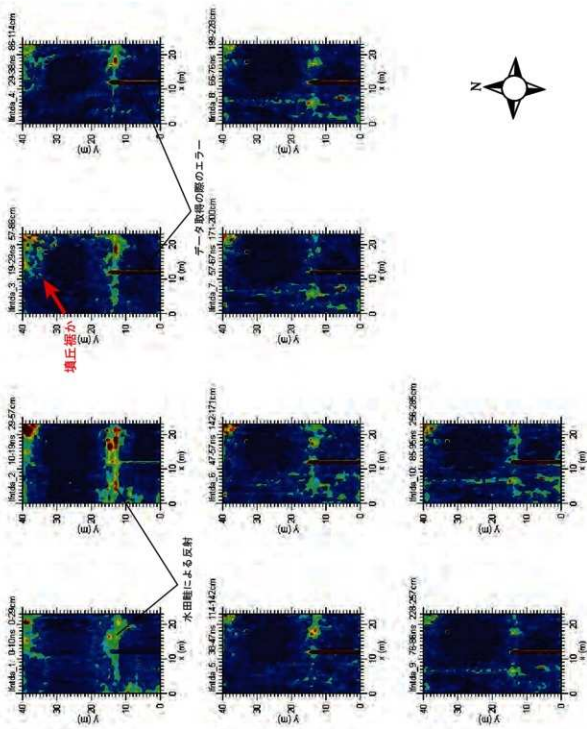


図33 西区の地中レーク探査結果 (タイムスライス図)

深度19-29ns (推定深度: 57-86cm) 以深で、X=12mライン上に南北方向に延びる異常応答はデータ取得時のエラーであり、実際の地下構造を示すものではない。

図35に東区におけるタイムスライス図を示す。深度10-29ns (推定深度: 29-58cm) では探査区の北縁に異常応答が認められるが、これは同箇所存在したコンクリートブロック塀による反射と考えられる。深度20-29ns (推定深度59-87cm) ではX=43mライン上で南から北へ延びる線上の異常応答が認められる。この異常はY=30m付近で北西に向きを変えて延びていく。古墳に関連する遺構というよりも、かつての暗渠を捉えたものと考えられる。同探査区ではほかに目立った異常は認められず、前方部の存在を示すような異常部分も判読できなかった。

東西両区で得られたタイムスライス図を墳丘測量図および発掘調査成果に重ね合わせたものが図36である。西区では墳丘残存部および堀を捉えたと考えられる深度19-29ns (推定深度57-86cm) の図を、東区は西区の深度29-39ns (推定深度: 88-117cm) の図を載せている。東西で採用した図の解析深度が異なっている理由は、西区の平均水田高 (標高) が64.29mであるのに対し、東区は64.58mと0.3m程東区の標高が高く、同一水平面 (同一標高面) での結果を比較するためである。発掘調査で認められた墳丘と地中レーダ探査で推定された墳丘の残存部を元に復元すると一辺約30mの方形が推定される。

#### (5) 電気比抵抗探査の結果 (図37)

LINE000からLINE002の3本の測線では、測線の北端 (墳丘側) に高比抵抗の異常が認められた。しかし同地点はコンクリートブロックが存在した地点であり、同異常はコンクリートによる高比抵抗異常と考えられた。その他に目立った異常は認められない。LINE003では測線距離12~13m地点に比較的比抵抗の高い部分が存在する。この異常が何に由来するかは地中レーダ探査の結果と比較しても判断できなかった。局所的な地表の乾燥状態を反映したものであろうか。

#### (6) 小結

二反田古墳において方形主丘の規模、および前方部の存否とその位置・規模の推定を目的として物理探査をおこなった。その結果、現存する墳丘の南側において方形主丘の南西隅と考えられる異常応

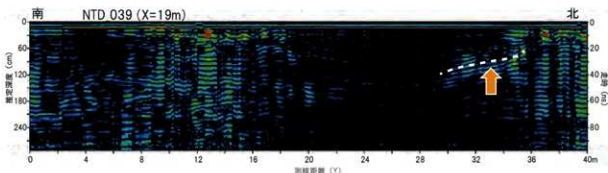


図34 代表的なCPRプロファイル (NTD\_039: 西区、南北測線)

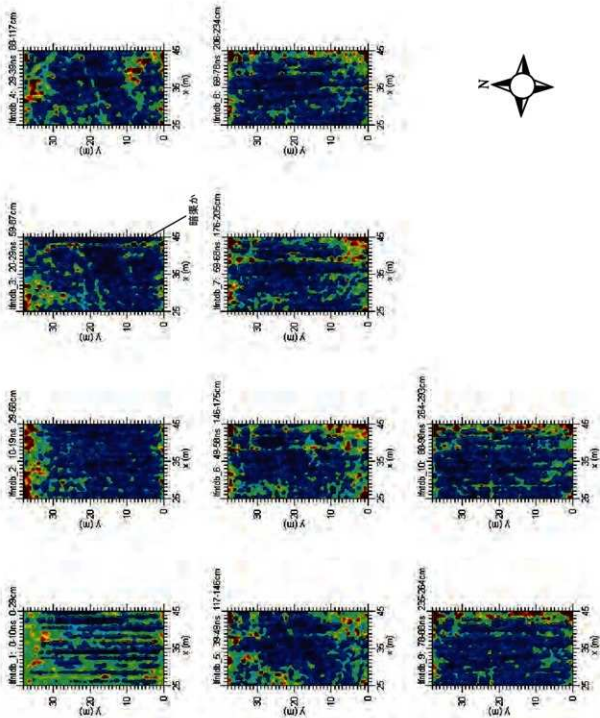


図35 東区的地中レーダ探査結果 (タイムスライス図)

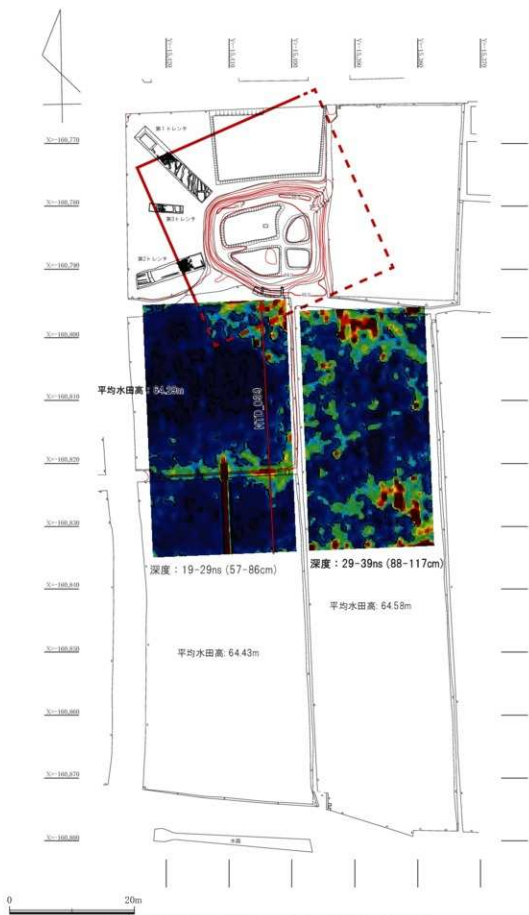


図36 発掘調査結果と地中レーダ探査結果の対比 (S=1/600)



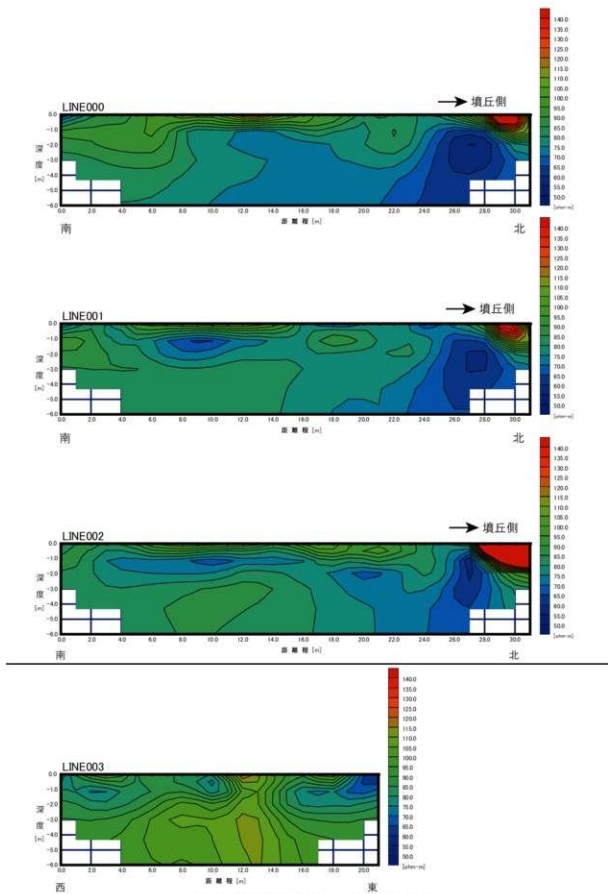


図37 電気比抵抗探査結果（比抵抗断面図）

答を捉えた。これを既往の発掘調査での所見と合わせて検討すれば、方形主丘の一边は長さ約30mであると推定される。また前方部については、今回探査を実施した範囲内すなわち方形主丘の南辺側では、その存在をうかがわせる異常応答を読み取ることはできなかった。ただし、物理探査の結果によって南辺側に前方部が存在しなかったと断言できるわけではなく、発掘調査をはじめとするさまざまな方法での確認を要することを付言しておく。このことはまた、方形主丘の南西隅の位置についても同様である。

(小田木・岸田)

### 3. 出土鱈付楕円筒埴輪の再検討

#### (1) 鱈付楕円筒埴輪の復元

今回、改めて検討をおこなった資料は、纏向遺跡第186次調査の第3トレンチから出土した埴輪である(図39-1~3)。これらの埴輪は、(1)は報告書<sup>3)</sup>の図17-56、(2)は図17-57、(3)は図18-58と対応する。この3つの埴輪は周濠埋土の上層からまとまった状態で出土しており、出土状況や胎土などから同一個体の可能性が高いものである。

これらの埴輪の形態を復元するにあたり、まず問題になってくるのは楕円筒埴輪の口径である。報告書では(1)を長径28.4cmと報告しており、この時期の楕円筒埴輪としてはかなり小型のものであると考えていた。しかし、大きさや形態について様々なご指摘をいただいたため、今回改めて復元をおこなった。

鱈付楕円筒埴輪(1)は口縁部が波状になっているという特徴を持つ。透孔は方形のものが2孔確認できており、この2孔の配置と口縁部の波状になっている形態から透孔の数を1段6孔と想定した場合、片側3孔の中心の透孔上部に口縁部の波の頂点が位置すると仮定できる。この頂点を中心にして反転させたところ長径45cmに復元することができた。同じように、(1)とまとまって出土した(2)も復元を試みたところ、長径46.2cmに復元することができた。また、(1・2)が同一個体であるとする、この鱈付楕円筒埴輪の段数は4段以上であると考えられる。

これらの情報をもとに、埴輪上半の形態復元をおこなったのが図38である。鱈付楕円筒埴輪の口縁部には、(1・2)と同時にまとまって出土した(3)を合わせた状態で復元している。(3)については、剥離痕跡の形状から口縁端部付近からの剥離である

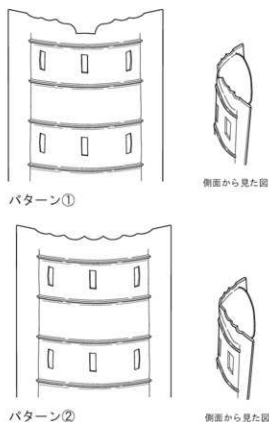


図38 鱈付楕円筒埴輪復元模式図

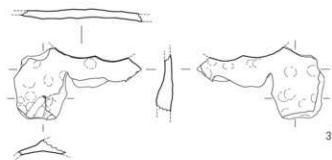
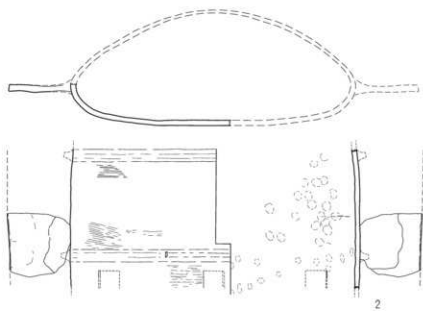
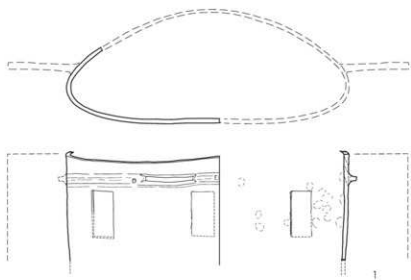


図39 第3トレンチ出土鯖付楕円筒埴輪 (S=1/6)

と考えられる。実際に(1)との接合関係は確認できていないが、剥離部分の形態は(1)に沿うような形であるため同一個体である可能性は高い。(3)の剥離痕跡を(1)の口縁部と鱗部の剥離部分に合わせた場合、山形部分の口縁部に沿うような形になる。また、(3)は上部が波状になっているという特徴を持つ。このことから形態を復元すると、大阪府柏原市松岳山古墳出土の翼状鱗付楕円筒埴輪<sup>2)</sup>の口縁部上の鱗部と類似した形態になると推測できる。そのためこの鱗部の形態については、松岳山古墳例を参考に復元している。この鱗部は、松岳山古墳例と同じく埴輪の中央部付近で途切れる形態と(パターン①)、途切れることなく口縁部全体を覆う形態という2つの可能性が考えられる(パターン②)。側面の鱗部については、(1・2)ともに剥離痕跡が途切れることなく続いていることから、松岳山古墳例のように側面の一部に翼状の鱗部がついていたのではなく、側面全体に上部の鱗部と一体化した鱗部がついていたと考えられる。

二反田古墳からは埴輪の鱗部片が多く出土している。その中には口縁部から剥離した痕跡がわかるものがあり(三沢2017:図13-10、図16-47・48)、これらは口縁部より上部に鱗が続いている。さらに、(三沢2017:図16-48)は口縁部の内側に鱗部が続いていることがわかるため、今回復元した楕円筒埴輪以外にも、口縁部上に鱗部が付く埴輪が存在していたと考えられる。

このように、第3トレンチから出土した鱗付楕円筒埴輪は、側面だけではなく上部にも鱗部を持つ特殊な形態をしていたと考えられる。(三沢)

#### 4. まとめ

今回、未調査地である墳丘の南側でおこなった地中レーダ探査結果と、纏向遺跡第186次(二反田古墳第1次)調査の第3トレンチから出土した鱗付楕円筒埴輪の再検討を踏まえて、二反田古墳について再度検討をおこないたい。

##### (1) 墳丘形態

纏向遺跡第186次調査では、墳丘の西側の裾部分を検出している。この調査結果から古墳の規模を想定すると、古墳の西裾から対角線上の現況の高まりの裾部分までの一辺30m以上はあると考えられた。今回、古墳の南側で地中レーダ探査をおこなったことによって墳丘の南西隅を確認でき、北西隅から南西隅までの大きさが一辺約30mであろうと推測された。

墳形について出土遺物から考えてみると、第186次調査時には周濠埋土から多くの白色円礫が出土している。これまで奈良県内で白色円礫が確認されている古墳の墳形は、終末期古墳である天理市ハミ塚古墳を除いたすべてが、全長100mを超える大型の前方後円墳か前方後方墳であるということに注目したい<sup>3)</sup>。さらに、鱗付楕円筒埴輪の出土している古墳は、いずれも全長100mを超える大型前方後円墳である。また、畿内では二反田古墳と同時期の古墳時代前期中葉ごろの方墳が確認されていない。このようなことから、南側には前方部などの痕跡は確認できなかったが、北側や東側に存在する可能性は十分に考えられる。

## (2) 埴輪

二反田古墳から出土している埴輪は普通円筒埴輪がほとんど見られず、楕円筒埴輪が大半を占めている。その中でも特徴的なのは、今回再検討をおこなった第3トレンチ出土の鱗付楕円筒埴輪である。この鱗付楕円筒埴輪は先述している通り、側面だけではなく上部にも鱗部が付く形態をしていた可能性があり、このような埴輪の類例は松岳山古墳や大阪府茨木市紫金山古墳<sup>4)</sup> 出土の翼状鱗付楕円筒埴輪で確認されているのみである。ただし松岳山古墳例とは、上部に鱗部が付く形態は同じであるが、側面の鱗部が一部だけではなく口縁部上から胴部側面まで続いているという点で相違がみられる。鱗付楕円筒埴輪の類例も少なく、上記の2例と天理市東殿塚古墳で確認されているのみである。松岳山古墳例と紫金山古墳例は形態的に類似した埴輪であるが、東殿塚古墳例や二反田古墳例は製作技法や形態的には類似する部分は少なく、それぞれが独自性を持って製作していたと考えられる。

(三沢)

## 5. おわりに

今回は天理大学の協力のもと、発掘調査をおこなっていない墳丘の南側の情報を得ることができた。東側と北側で調査をおこなっていないため、墳形について断定することはできないが、南西の隅の可能性のある異常応答を確認し墳丘の一边が約30mであろうと推測できたのは大きな進展である。また、発掘調査で出土した埴輪の形態について、平成27年度報告書でも特徴的な埴輪であると報告していたが、埴輪検討会の皆様にいただいたご指摘によって形態を推測し復元することができ、その特徴をより捉えることができた。ここに記して厚く感謝申し上げます。

### 【註記】

- 1) 三沢朋未2017「郷向遺跡第186次(二反田古墳第1次)発掘調査報告」「平成27年度国庫補助による発掘調査報告書」桜井市教育委員会
- 2) 安村俊史2009「平成21年度夏季企画展 松岳山古墳群を考える」柏原市立歴史資料館
- 3) 青木 敬2010「第2節 白色円礫—その機能と変遷—」「玉手山1号墳の研究」大阪市立大学日本史研究室
- 4) 紫金山古墳出土の埴輪については、口縁部付近が出土していないため正確な形態は不明であるが、翼状の鱗が付く胴部付近の形態が松岳山古墳出土の埴輪と同じであるため上部にも鱗部が付くと考えられる。
- 5) 註1)の文献と同じ



地中レーダ探査作業風景



電気探査作業風景

# 附載 1 纏向遺跡第192次調査出土土製品の砂礫について

奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員 奥田 尚

## 1. はじめに

纏向遺跡第192次調査で出土した埴輪27資料と土器15資料の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。裸眼で土製品全体の砂礫を観察し、観察良好な部分を倍率20倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果と推定される砂礫の採取地、砂礫の使用傾向について述べる。

## 2. 砂礫の特徴

識別した砂礫の石種と鉱物種は、花崗岩、閃緑岩、斑禰岩、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。これらの特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色、粒形が角、垂角、粒径が最大7mmである。石英・長石、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰白色、灰色、粒形が角、粒径が最大6mmである。石英・長石・角閃石、長石・黒雲母・角閃石、長石・角閃石が噛み合っている。角が鋭く残る破砕されたような粒がみられる資料がある。

斑禰岩：色は灰色、暗灰緑色、粒形が角、粒径が最大6mmである。長石・角閃石・輝石、長石・輝石、輝石・橄欖石が噛み合っている。角が鋭く残る破砕されたような粒がみられる資料がある。

石英：無色透明、灰色透明で、粒形が角、粒径が最大3mmである。複六角錐をなすもの（自形の石英）がある。

長石：灰白色透明、灰白色で、粒形が角、粒径が最大8mmである。角が鋭く残る破砕されたような粒がみられる資料がある。

黒雲母：黒色、金色、茶褐色で、粒形が板状、粒状、粒径が最大6mmである。

角閃石：黒色で、粒形が角、粒径が最大7mmである。結晶面がみられるもの（EF）がある。また、角が鋭く残る破砕されたような粒がみられる資料がある。

輝石：黒色透明、暗緑色、暗灰緑色で、粒形が角、粒径が最大4mmである。火山灰起源と推定される自形のものが含まれる資料、角が鋭く残る破砕されたような粒がみられる資料がある。

## 3. 砂礫の類型区分と採取推定地

観察した砂礫を主とする砂礫構成をもとに源岩を推定し、類型に区分すれば花崗岩質岩起源と推定されるⅠ類型、閃緑岩質岩起源と推定されるⅡ類型、斑禰岩質岩起源と推定されるⅢ類型となる。更に、残った少量の砂礫をもとに細区分すれば、Ⅰ類型はⅠb類型、Ⅰbd類型、Ⅰbc類型、Ⅰc類型、Ⅰe類型に、Ⅱ類型はⅡa類型、Ⅱad類型に、Ⅲ類型はⅢa類型となる。各類型の特徴とその砂礫の採取

推定地について述べる。砂礫の採取推定地は縦向遺跡に一番近距離の地で同様の砂礫が採取できる地とする。また、斑礫岩や閃緑岩を砕いたような砂礫が含まれる資料については、砕かれたような斑礫岩や閃緑岩を構成する岩石・鉱物を除いた砂礫により採取地を推定する。

Ib類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。砂礫構成から、角閃石が少ない穴師付近の砂礫と角閃石が僅かに含まれる巻向川の砂礫が推定される。

Ibd類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・自形の石英が含まれる流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。砂礫構成から自形の石英がみられる初瀬川の砂礫が推定される。

Ibc類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・斑礫岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。斑礫岩質岩起源と推定される長石・角閃石・輝石は角が鋭く残る破砕されたような砂礫である。破砕されたような砂礫を除けば、砂礫構成から穴師付近の砂礫が推定される。

Ic類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、斑礫岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。斑礫岩質岩起源と推定される長石・角閃石・輝石は角が鋭く残る破砕されたような砂礫である。破砕されたような砂礫を除けば、砂礫構成から穴師付近の砂礫が推定される。

Ie類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、火山灰起源と推定される自形の輝石が僅かに含まれる。このような砂礫構成の砂礫を見聞していない。産地を推定しがたい。

IIa類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。閃緑岩質岩起源と推定される長石や角閃石、輝石には、角が鋭く残る破砕されたような砂礫が含まれ、黒雲母が粒状で目立つ資料、閃緑岩に結晶面がある柱状の角閃石がみられ、破砕されたような粒がみられない資料がある。前者には穴師付近と榎原市の北東部付近の砂礫と推定される資料があり、後者は岡山県の足守川流域の加茂遺跡付近の砂礫（吉備とする）と推定される。

IIad類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫・自形の石英が僅かに含まれる。このような砂礫構成の砂礫を見聞していない。産地を推定しがたい。

IIIa類型：斑礫岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる。斑礫岩質岩起源と推定される長石や角閃石、輝石に角が鋭く残る破砕されたような砂礫が含まれる。また、細かい角閃石や輝石には角に凹みがあるものがあり、石英が少ない。斑礫岩質岩起源の砂礫が分布する茅原付近の砂礫と推定される。

#### 4. 砂礫の採取推定地とその傾向

観察した土製品の砂礫の採取地は桜井市の穴師付近、巻向川付近、茅原付近、初瀬川付近、榎原市の北東部付近、岡山県の足守川付近と少なくとも6地点が推定される。これらの砂礫の採取地付近を土製品の製作地とする。

土製品の砂礫には、斑礫岩や閃緑岩を破砕して混和したような砂礫構成を示すもの、河川や沖積層

にみられるような自然堆植物にみられる砂礫構成を示すものがある。表6に示す「砕」の記号がある砂礫には破砕されたような砂礫が含まれる。斑礫岩の破片が含まれる資料は穴師付近・茅原付近とした土製品に、閃緑岩の破片が含まれる資料は樺原北東付近とした土製品にみられる。

器種的にみれば、埴輪は穴師付近、巻向川付近、初瀬川付近、樺原北東付近で、土器は穴師付近、巻向川付近、茅原付近、初瀬川付近、樺原北東付近、吉備付近で製作されていると推定される。以上のものが巻野内に運ばれたと推定される。

観察した資料は埴輪を主としており、土器については僅かの観察個数であることから土器を製作した人々の集まってきた範囲が砂礫構成でみれば吉備のみとなる。埴輪は、穴師付近、巻向川付近、初瀬川付近、樺原北東付近で製作されたと推定されるものがあり、奈良盆地の南東部付近で製作されたものであるとなる。また、破片数での判断となるが、穴師付近と推定されるものが27資料中の19資料を占め、非常に多い。遠地となる樺原北東付近の資料は僅か1資料である（表7参照）。

土器の器形をもとに巻野内に集まって来た人々の出身地を推定すれば、更に、地域は増えることだろう。今回、観察した近江系（湖東）とされる甕（図14-57）は、斑礫岩の破片を穴師付近の砂礫に混ぜたような砂礫構成を示す。近江から来た人が穴師付近で製作した埴輪の砂礫と同じような砂礫を使用して甕を製作していることになる。この人は何らかの目的で湖東を出発し、穴師付近に到着し、埴輪の製作に従事していた可能性が窺える。また、山陰系とされる高坏（図12-27）にも長石を砕いたような破片がみられ、破片を混和したような技法がみられる。北近畿あるいは東海系とされる高坏（図13-46）は穴師付近の砂礫構成のものである。僅かの数しか土器を観察していないが、器形からみれば、山陰・吉備・近江・東海あるいは北近畿と各地の土器があり、これらの吉備を除く土器の砂礫は穴師付近の砂礫の砂礫と推定される。近江・山陰の人は埴輪作りに従事していた可能性があるが、吉備や北近畿（東海？）の人は何の為に穴師付近に来たのだろうか。

## 5. おわりに

箸墓古墳や桜井茶臼山古墳の壺形土器の砂礫には斑礫岩を砕いたような砂礫が多く含まれ、樺原市の葛本弁天塚古墳の埴輪や土器には黒雲母が目立つ閃緑岩を砕いたような砂礫が多く含まれる。両者は一見似ているように見えるが、砂礫構成が明瞭に異なること、更に、地域によって砕かれる石種が異なることが明らかとなった。今回の埴輪の観察により、1資料のみであるが樺原北東付近の砂礫を含む埴輪が観察でき、地域的な交流があったことも明らかとなった。

桜井茶臼山古墳の壺形土器の観察時、僅かであるがIc類型で、斑礫岩を破砕されたような砂礫を含むものがあり、他はIII類型の砂礫構成であった。2地域で製作されていることは推定できたが、今回の観察によりIc類型の土器は穴師付近で製作されている可能性が高いことが明らかとなった。

斑礫岩を砕いたような砂礫を混和した胎土の土製品には、纏向遺跡192次調査出土の資料、箸墓古墳の壺形土器、桜井茶臼山古墳の壺形土器、山の神祭祀遺跡出土の土製品等があり、古墳時代初頭からこれらの祭祀に関係する土製品を穴師付近や茅原付近で製作していたことが窺える。





表7 埴輪・土器の類型と砂礫の採集推定地の集計

類型	碎片の有無	砂 礫 の 採 取 推 定 地							合 計
		穴師付近	巻向川	茅原付近	初瀬川	櫻原北東	吉備地方	不明	
I b 類型	無	13 (3)	2						15
I bd 類型	無				3			1	4
I bc 類型	有	6							6
I c 類型	有	3 (1)							3
I e 類型	無							1 (1)	1
II a 類型	有	1				3 (2)			4
	無						2 (2)		2
II ad 類型	無							1	1
III a 類型	有			6 (6)					6
合 計		23	2	6	3	3	2	3	42

( ) 内は土器の個数

## 【参考文献】

- 奈良県立橿原考古学研究所1996「中山大塚古墳」附編1 葛木弁天塚古墳 奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊
- 奥田 尚2018「倭迹迹日百襲姫命 大市墓出土の祭祀に関する土製品の砂礫構成と砂礫の産地」『書陵部紀要』第69号 宮内庁書陵部
- 奥田 尚2018「山の神祭祀遺跡出土土製模造品の砂礫組成」『大美和』第135号 大神神社

# 圖 版





調査前状況(南より)



遺構検出状況(北より)



遺構完掘状況(北より)



南壁断面(北西より)



SX-104断面(南より)



SD-106断面(南より)



SK-110断面(東より)



SK-110土器出土状況  
(南より)



SX-113断面(南より)

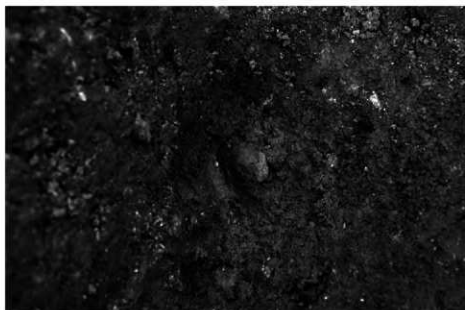


SX-113上層土器出土状況(西より)



落ち込み 遺物出土状況(北より)





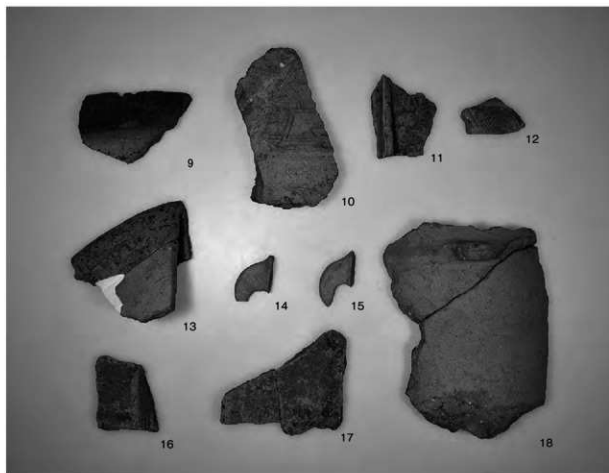
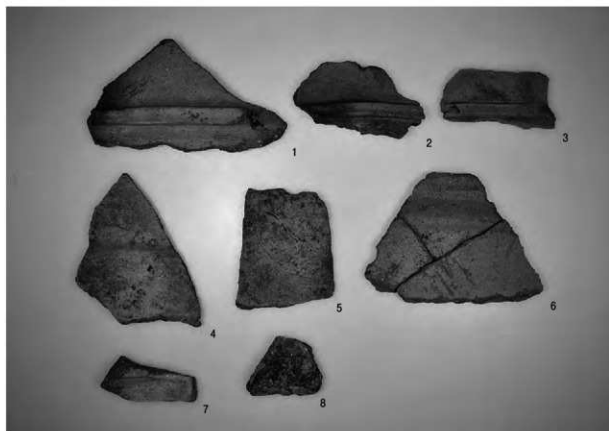
SX-113青銅製品  
出土状況(南より)



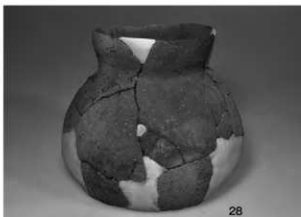
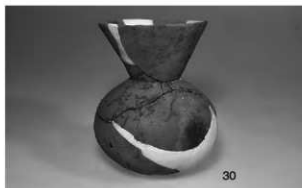
落ち込み断面(西より)

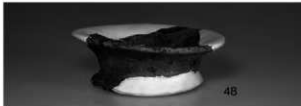
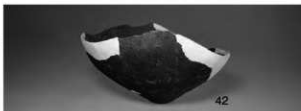
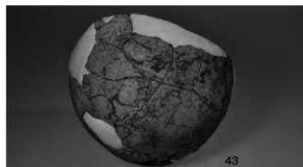


調査終了後(南より)

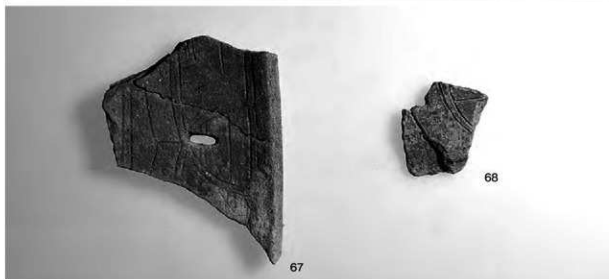


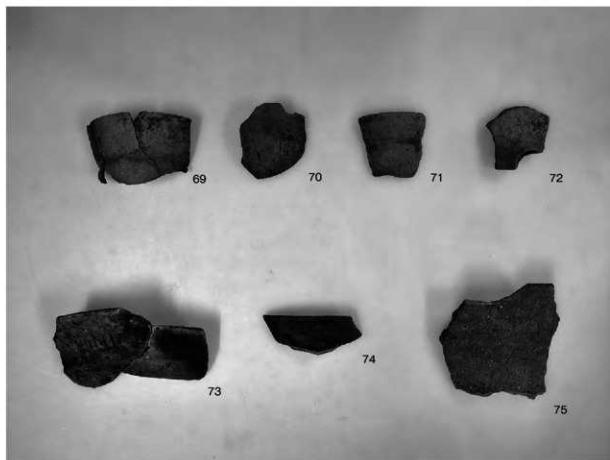












出土遺物⑦





第1トレンチ 全景  
(西より)



第1トレンチ 全景  
(南東より)



SX114完掘状況  
(南より)



SX114断面 (東より)



SX114断面  
(南より)



SX115遺構検出状況  
(南より)



SX115検出状況  
(上層除去後、西より)



SX115完掘状況  
(北より)



SX115断面 (北より)



SX115断面(西より)



SX116遺物出土状況  
(北より)



SX127断面(北より)



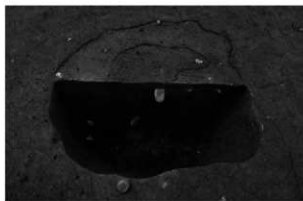
SX127断面 (南より)



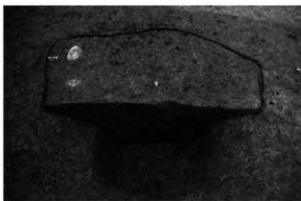
SX127完掘状況  
(北東より)



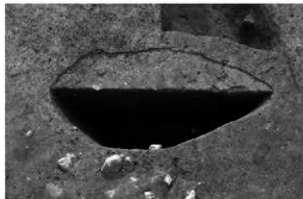
SX127内遺構検出状況  
(上層除去後、  
北東より)



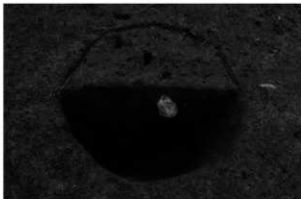
SP102断面 (南より)



SK103断面 (南より)



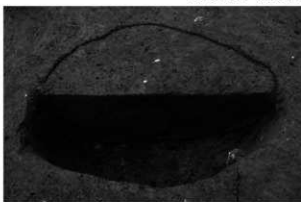
SK104断面 (東より)



SP107断面 (南より)



SP108断面 (南より)



SP110断面 (南より)



SK113断面 (北西より)



SK116断面 (北より)



SK120断面 (北より)



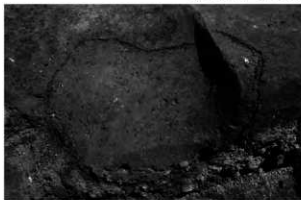
SK121断面 (北より)



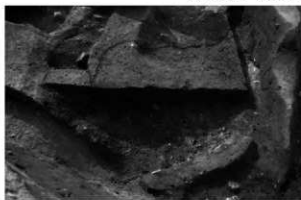
SP122断面 (北より)



SP124断面 (南より)



SP125断面 (南より)



SK129断面 (南東より)



SP130断面 (南より)



第2トレンチ 全景  
(西より)

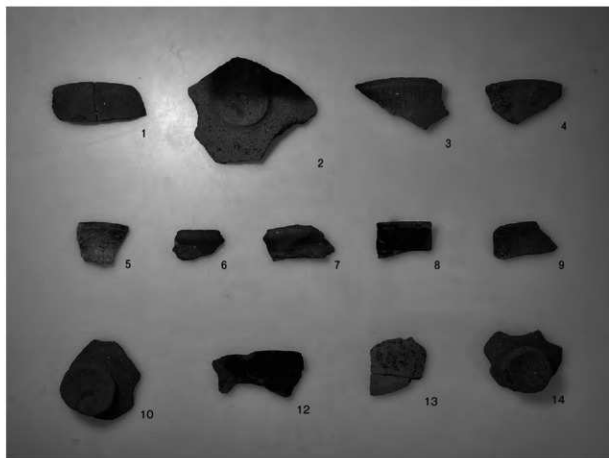


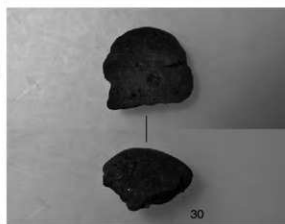
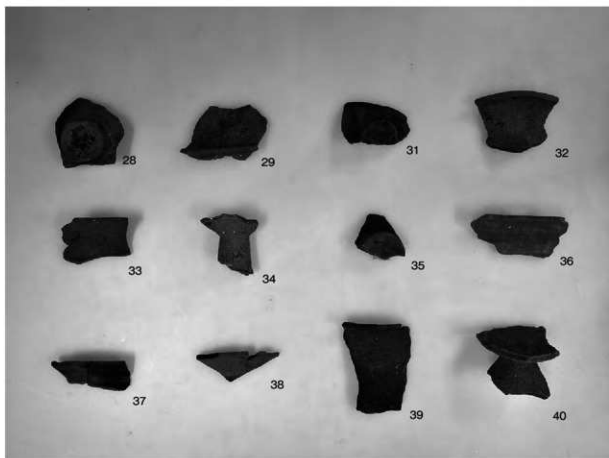
第2トレンチ  
西壁断面(東より)



第2トレンチ  
石敷き断面(西より)







## 報告書抄録

書名	桜井市 平成29年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第49集
執筆者名	三沢朋未(編集)、丹羽恵二、藤村裕美、小田木治太郎、岸田 徹、奥田 尚
編集機関	桜井市教育委員会文化財課
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市芝58-2 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366
発行年月日	2019年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
縦向遺跡第192次	桜井市巻野内 188-1	292061	11D-0487	34° 32' 37"	135° 50' 47"	20170509～ 20170526	48㎡	駐車場造成に伴う発掘調査
脇本遺跡第22次	桜井市脇本 423-3	292061	15A-0002	34° 31' 1"	135° 52' 19"	20170522～ 20170619	41㎡	個人住宅建築に伴う発掘調査
二反田古墳	桜井市大豆越 145-1	292061	11D-0487	34° 31' 2"	135° 49' 55"	20171223～ 20171226	1,620㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
縦向遺跡第192次	集落跡	落ち込み、土坑	埴輪、土師器、青銅製品	
脇本遺跡第22次	集落跡	竪穴住居か、方形土坑、柱穴	土師器	
二反田古墳	古墳	周濠		物理探査

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第49集

桜井市

平成29年度国庫補助による  
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会  
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市大字芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 2019年3月15日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464